

履修の手引 講義概要

2019年度

日本語教員養成課程



北海学園大学
Hokkai-Gakuen University

北海学園大学日本語教員養成課程について

本学における日本語教員養成プログラムは、日本語非母語話者に対する日本語教員を育成する目的で1998年から行われ、2000年からは人文学部を窓口とする事務局や委員会体制を整備し正式な「課程」として発足しました。本課程のカリキュラムは、当初、1985年の文部省調査委員会報告による「日本語教員養成の標準的教育内容」を指針として策定されました。しかし、国内外の日本語学習者の増加と多様化など日本語教育を取り巻く状況が大きく変化したことを受け、文化庁日本語教員養成に関する調査会が新たな枠組みの広範囲にわたる教育内容を提示してきました（下の表を参照）。そこで、本学の課程においても文化庁による新教育内容の意義を認め、2005年の人文学部カリキュラム変更に関連させ、課程カリキュラムは大幅な改定に至りました。さらに、2014年からの新カリキュラム始動に伴い、本課程においても科目の新設、名称変更などがあります。また、2017年度から科目設定が5つの区分（下の表を参照）に沿った形で配分され、各区分の履修要件が若干変更しています。年度別の開講科目、履修単位数等詳しい内容は3～13頁を確認してください。

日本語教員の免許、資格は公的な制度として確立されているものではなく、資格の認定は日本語教員養成課程をもつそれぞれの教育機関に委ねられています。本大学の場合は、申請に基づき、大学卒業を前提として、課程の修了者に「日本語教員養成課程修了証」を授与しています。なお、日本語教育機関によっては教師資格として課程修了以外の要件も求められる場合がありますので、詳しくは課程担当教員に相談してください。

文化庁の教員養成に関する調査会答申「日本語教員養成において必要とされる教育内容」

(2000年3月30日公開された内容)

	領域	区分	内容	
コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン	社会・文化・地域に関わる領域	①社会・文化・地域	世界と日本	歴史/文化/文明/社会/教育/哲学/国際関係/日本事情/日本文学……
			異文化接触	国際協力/文化交流/留学生政策/移民・難民政策/研修生受入政策/外国人児童生徒/帰国児童生徒/地域協力/精神衛生……
			日本語教育の歴史と現状	日本語教育史/言語政策/教員養成/学習者の多様化/教育哲学/学習者の推移/日本語試験/各国語試験/世界各地の日本語教育事情/日本各地域の日本語教育事情……
	教育に関わる領域	②言語と社会	言語と社会の関係	ことばと文化/社会言語学/社会文化能力/言語接触/言語管理/言語政策/言語社会学/教育哲学/教育社会学/教育制度……
			言語使用と社会	言語変種/ジェンダー差・世代差/地域言語/待遇・ポライトネス/言語・非言語行動/コミュニケーション・ストラテジー/地域生活関連情報……
			異文化コミュニケーションと社会	異文化受容・適応/言語・文化相対主義/自文化(自民族)中心主義/アイデンティティ/多文化主義/異文化間トランス/言語イデオロギー/言語選択……
	言語に関わる領域	③言語と心理	言語理解の過程	言語理解/談話理解/予測・推測能力/記憶/視点/言語学習……
			言語習得・発達	幼児言語/習得過程(第一言語・第二言語)/中間言語/言語喪失/バイリンガリズム/学習過程/学習者タイプ/学習ストラテジー……
			異文化理解と心理	異文化間心理学/社会的スキル/集団主義/教育心理/日本語の学習・教育の情意的側面……
	言語に関わる領域	④言語と教育	言語教育法・実習	実践的知識/実践的能力/自己点検能力/カリキュラム/コースデザイン/教室活動/教授法/評価法/学習者情報/教育実習/教育環境/地域別・年齢別日本語教育法/教育情報/ニーズ分析/誤用分析/教材分析・開発……
			異文化間教育・コミュニケーション教育	異文化間教育/多文化教育/国際・比較教育/国際理解教育/コミュニケーション教育/スピーチ・コミュニケーション/異文化コミュニケーション訓練/開発コミュニケーション/異文化マネジメント/異文化心理/教育心理/言語間対照/学習者の権利……
			言語教育と情報	教材開発/教材選択/教育工学/システム工学/統計処理/メディア・リテラシー/情報リテラシー/マルチメディア……
	言語に関わる領域	⑤言語	言語の構造一般	一般言語学/世界の諸言語/言語の種類/音声の種類/形態(語彙)の種類/統語の種類/意味論の種類/語用論の種類/音声と文法……
			日本語の構造	日本語の系統/日本語の構造/音韻体系/形態・語彙体系/文法体系/意味体系/語用論的規範/表記/日本語史……
			言語研究	理論言語学/応用言語学/情報学/社会言語学/心理言語学/認知言語学/言語地理学/対照言語学/計量言語学/歴史言語学/コミュニケーション学……
			コミュニケーション能力	受容・理解能力/表出能力/言語運用能力/談話構成能力/議論能力/社会文化能力/対人関係能力/異文化調整能力……

北海学園大学日本語教員養成課程履修規程

(目的)

第1条 この規程は、北海学園大学（以下「本大学」という。）の学則第51条の2に基づき、日本語教員養成課程（以下「課程」という。）の授業科目、単位、履修方法に関する事項を定める。

(授業科目)

第2条 課程の授業科目、単位数及び年次配当並びに必修科目、選択科目の区別は、学則別表12(1)及び(2)のとおりとする。

(履修願)

第3条 課程の授業科目を履修しようとする者は、所定の期間内に、受講料等を納入し、「履修願」を提出して、その許可を受けなければならない。

(単位の修得)

第4条 単位を修得するためには、履修した授業科目の試験に合格しなければならない。

(試験)

第5条 試験は、原則として、その授業科目の授業が終了した学期末毎に行なう。

(成績の評価)

第6条 授業科目の成績評価は、秀、優、良、可及び不可とし、秀、優、良及び可を合格とする。ただし、この成績評価になじまない一部の科目は、合、否とする。

(修了要件)

第7条 本大学の学生が課程を修了するためには、卒業に必要な単位を修得し学士の学位を授与される者で、別表12の授業科目のうち、必修・選択科目を含み、32単位以上を修得しなければならない。

(修了証書の授与)

第8条 学長は、課程の授業科目を履修し、修了に必要な単位（32単位以上）を修得した者に、申請に基づいて本大学所定の修了証書を授与する。

(受講料等)

第9条 課程の授業科目を履修する者は、本大学学則別表14(9)に定める受講料等を納入しなければならない。

(科目等履修生)

第10条 本大学の科目等履修生規程に基づいて入学した者は、当該学部及び課程委員会の許可を得て、課程の授業科目を履修することができる。

2 科目等履修生が一年間に履修できる単位数は28単位以内とする。

3 科目等履修生で別表12(1)、(2)の授業科目のうち、必修・選択科目を含み、32単位以上修得した者には、本大学所定の修了証書を授与する。

附 則

1 この規程は、平成12年4月1日から施行する。

2 ただし、この規程は、平成10年度以降入学者（科目等履修生は除く。）から適用する。

附 則

この規程は、平成15年4月1日から施行する。

附 則

1 この規程は、平成17年4月1日から施行する。

2 ただし、平成16年度以前入学生については従前の規定を適用する。

附 則

1 この規程は、平成24年4月1日から施行する。

2 ただし、平成23年度以前の入学者については従前の規則による。

附 則

この規程は、平成28年4月1日から施行する。

日本語教員養成課程修了要件

2017 年度以降入学者適用

社会・文化・地域	8 単位以上
言語と社会	2 単位以上
言語と心理	2 単位以上
言語と教育	10 単位以上
言語	10 単位以上
合計	32 単位以上

2016 年度以前入学者適用

言語領域（言語）	10 単位以上
言語領域（外国語）	2 単位以上
教育領域	12 単位以上
社会・文化・地域領域	8 単位以上
合計	32 単位以上

2017 年度以降入学者 適用

2 部

【対象学科欄の記号について】 ○…所属学科で開講されている科目 日語…日本語教員養成課程科目として開講されている科目
 ×…開講されていない（履修できない）科目

○印必修	授 業 科 目	年次及び単位数					対 象 学 科						備 考	開 講 区 分		
		1	2	3	4	計	経 済	地 域 経 済	経 営	法 律	政 治	日 本 文 化			英 米 文 化	
	社会・文化・地域															
	日 本 文 学 I	2				2	○	○	○	○	○	○	○	○	8 単位以上必修	一般教育科目
	歴 史 学 I	2				2	○	○	○	○	○	○	○		一般教育科目	
	歴 史 学 II	2				2	○	○	○	○	○	○	○		一般教育科目	
	歴 史 学 III	2				2	○	○	○	○	○	○	○		一般教育科目	
	歴 史 学 IV	2				2	○	○	○	○	○	○	○		一般教育科目	
	国 際 事 情	2				2	×	×	○	○	○	○	○		一般教育科目	
	日 本 文 学 史 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	} 英米文化学科の 学生は2年次開 講	人文学部専門科目	
	日 本 文 学 史 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目	
	日 本 文 化 概 論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目	
	日 本 文 化 概 論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目	
	日 本 史 概 論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目	
	日 本 史 概 論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目	
	ヨーロッパ文化概論		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目	
	キリスト教文化論		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目	
	アイヌ文化論 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目	
	アイヌ文化論 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目	
	アジア地域論 I			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目	
	アジア地域論 II			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目	
	言語と社会															
	世界の言語と文化	2				2	○	○	○	○	○	○	○	2 単位以上必修	一般教育科目	
	異文化コミュニケーション	2				2	○	○	○	○	○	○	○	一般教育科目		
	アイヌの言語と文化	2				2	○	○	○	○	○	○	○	一般教育科目		
	言語と心理															
	人間関係論	2				2	○	○	○	○	○	○	○	2 単位以上必修	一般教育科目	
	日本語教育学特論		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	人文学部専門科目		
	言語と教育															
	コンピュータ科学	2				2	×	×	×	○	○	○	○	必修8単位含み		
○	日本語教授法 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	10 単位以上必修		
○	日本語教授法 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	一般教育科目		
○	日本語教授法 III			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	人文学部専門科目		
○	日本語教授法 IV			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	人文学部専門科目		
	日本語教育演習			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	人文学部専門科目		
	日本語教育特別演習			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	人文学部専門科目		
	言語															
	英語コミュニケーション I	1				1	○	○	○	○	○	○	○	必修4単位含み		
	英語コミュニケーション II	1				1	○	○	○	○	○	○	○	10 単位以上必修		
	言語学 I	2				2	○	○	○	○	○	○	○	一般教育科目		
	言語学 II	2				2	○	○	○	○	○	○	○	一般教育科目		
	Communication Skills I	2				2	×	×	×	×	○	○	○	} 人文学部の学生 のみを対象に開 講		
	Communication Skills II	2				2	×	×	×	×	○	○	○		人文学部専門科目	
	日本語学概論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	人文学部専門科目		
	日本語学概論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	人文学部専門科目		
	日本語学特論 I			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	人文学部専門科目		
	日本語学特論 II			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	人文学部専門科目		
	日本語学特論 III			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	人文学部専門科目		
	日本語学特論 IV			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	人文学部専門科目		
	対照言語学		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	人文学部専門科目		
	英語学概論 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	人文学部専門科目		
	英語学概論 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	人文学部専門科目		
	英語学特論 I			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	人文学部専門科目		
	英語学特論 II			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	人文学部専門科目		
	計	50	18	22	0	90										

開講科目一覧および年次配当

2016 年度入学者 適用

1 部

【対象学科欄の記号について】 ○…所属学科で開講されている科目 日語…日本語教員養成課程科目として開講されている科目 ×…開講されていない(履修できない)科目

○印必修	授業科目	年次及び単位数					対象学科													備考	開講区分
		1	2	3	4	計	経済	地域経済	経営	経営情報	法律	政治	日本文化	英米文化	社会環境工	建築	電子情報工	生命工			
○	言語領域 (言語)																			必修4単位含み 10単位以上必修	一般教育科目 一般教育科目 一般教育科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目
	世界の言語と文化	2				2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	言語学 I	2				2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
	言語学 II	2				2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
	日本語学概論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○				
	日本語学概論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○				
	日本語学特論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○				
	日本語学特論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○				
	日本語学実習	2			2	2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○				
	対照言語学	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○				
英語学概論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○					
英語学概論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○					
言語領域 (外国語)																			2単位以上必修	一般教育科目 一般教育科目 一般教育科目 一般教育科目 人文学部の学生のみを対象に開講 人文学部専門科目 人文学部専門科目	
英語コミュニケーション I	1				1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○					
英語コミュニケーション II	1				1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○					
英語コミュニケーション III	1				1	○	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○					
英語コミュニケーション IV	1				1	○	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○					
CommunicationSkills I	2				2	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×					
CommunicationSkills II	2				2	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×					
教育領域																			必修8単位含み 12単位以上必修	一般教育科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目	
コンピュータ科学	2				2	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○					
日本語教授法 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○					
日本語教授法 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○					
日本語教授法 III	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○					
日本語教授法 IV	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○					
日本語教育学特論	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○					
日本語教育演習	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○					
日本語教育特別演習	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○					
社会・文化・地域領域																			8単位以上必修	一般教育科目 一般教育科目 一般教育科目 一般教育科目 一般教育科目 一般教育科目 一般教育科目 一般教育科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目 人文学部専門科目	
人間関係論	2				2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○					
日本文学	2				2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○					
異文化コミュニケーション	2				2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○					
歴史学 I	2				2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○					
歴史学 II	2				2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○					
歴史学 III	2				2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○					
歴史学 IV	2				2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○					
国際事情	2				2	×	×	○	○	○	○	○	○	○	×	×					
アイヌの言語と文化	2				2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○					
日本文学史 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○					
日本文学史 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○					
日本文化概論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○					
日本文化概論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○					
日本史概論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○					
日本史概論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○					
ヨーロッパ文化概論	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○					
キリスト教文化論	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○					
アイヌ文化論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○					
アイヌ文化論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○					
アジア地域論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○					
アジア地域論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○	○	○	○	○					
計		50	20	18	0	88															

2016 年度入学者 適用

2 部

【対象学科欄の記号について】 ○…所属学科で開講されている科目 日語…日本語教員養成課程科目として開講されている科目
 ×…開講されていない（履修できない）科目

○印必修	授 業 科 目	年次及び単位数					対 象 学 科						備 考	開 講 区 分		
		1	2	3	4	計	経 済	地 域 経 済	経 営	法 律	政 治	日 本 文 化			英 米 文 化	
○ ○	言語領域 (言語)															
	世界の言語と文化 I	2				2	○	○	○	○	○	○	○			
	言語学 I	2				2	○	○	○	○	○	○	○			
	言語学 II	2				2	○	○	○	○	○	○	○			
	日本語学概論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			
	日本語学概論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			
	日本語学特論 I	2		2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			
	日本語学特論 II	2		2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			
	日本語発声実習	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			
	対照言語学	2	2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			
英語学概論 I	2	2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
英語学概論 II	2	2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
言語領域 (外国語)																
英語コミュニケーション I	1				1	○	○	○	○	○	○	○				
英語コミュニケーション II	1				1	○	○	○	○	○	○	○				
CommunicationSkills I	2				2	×	×	×	×	×	○	○				
CommunicationSkills II	2				2	×	×	×	×	×	○	○				
教育領域																
コンピュータ科学	2				2	×	×	×	○	○	○	○				
日本語教授法 I	2	2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本語教授法 II	2	2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本語教授法 III	2		2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本語教授法 IV	2		2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本語教育学特論	2		2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本語教育演習	2		2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本語教育特別演習	2		2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
社会・文化・地域領域																
人間関係論	2				2	○	○	○	○	○	○	○				
日本文学	2				2	○	○	○	○	○	○	○				
異文化コミュニケーション	2				2	○	○	○	○	○	○	○				
歴史学 I	2				2	○	○	○	○	○	○	○				
歴史学 II	2				2	○	○	○	○	○	○	○				
歴史学 III	2				2	○	○	○	○	○	○	○				
歴史学 IV	2				2	○	○	○	○	○	○	○				
国際事情	2				2	×	×	○	○	○	○	○				
アイヌの言語と文化	2				2	○	○	○	○	○	○	○				
日本文学史 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本文学史 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本文化概論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本文化概論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本史概論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本史概論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
ヨーロッパ文化概論	2	2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
キリスト教文化論	2	2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
アイヌ文化論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
アイヌ文化論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
アジア地域論 I	2		2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
アジア地域論 II	2		2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
計		50	18	18	0	86										

2011～2013 年度入学者 適用

2 部

【対象学科欄の記号について】 ○…所属学科で開講されている科目 日語…日本語教員養成課程科目として開講されている科目
 ×…開講されていない（履修できない）科目

○印必修	授 業 科 目	年次及び単位数					対 象 学 科						備 考	開 講 区 分		
		1	2	3	4	計	経 済	地 域 経 済	経 営	法 律	政 治	日 本 文 化			英 米 文 化	
○ ○	言語領域 (言語)															
	言語学 I	2				2	○	○	○	○	○	○	○			
	言語学 II	2				2	○	○	○	○	○	○	○			
	世界の言語と文化	2				2	○	○	○	○	○	○	○			
	専門言語学		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○			
	日本語学概論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			
	日本語学概論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○			
	日本語学 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語			
	日本語学 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語			
	日本語史		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語			
対照言語学		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本語発声実習	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語				
日本語表現法	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語				
言語領域 (外国語)																
オーラルコミュニケーション I	1				1	○	○	○	○	○	○	×				
オーラルコミュニケーション II	1				1	○	○	○	○	○	○	×				
Listening I	1				1	×	×	×	×	×	×	○				
Listening II	1				1	×	×	×	×	×	×	○				
Speaking I	1				1	×	×	×	×	×	×	○				
Speaking II	1				1	×	×	×	×	×	×	○				
教育領域																
コンピュータ科学	2				2	×	×	×	○	○	○	○				
日本語教授法 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本語教授法 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本語教授法 III			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本語教授法 IV			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
異文化理解論		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	○				
異文化間教育学		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本語教育演習 I			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本語教育演習 II			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
社会・文化・地域領域																
人間関係論	2				2	○	○	○	○	○	○	○				
異文化コミュニケーション	2				2	○	○	○	○	○	○	○				
歴史学 I	2				2	○	○	○	○	○	○	○				
歴史学 II	2				2	○	○	○	○	○	○	○				
歴史学 III	2				2	○	○	○	○	○	○	○				
歴史学 IV	2				2	○	○	○	○	○	○	○				
日本文学	2				2	○	○	○	○	○	○	○				
国際事情	2				2	×	×	○	○	○	○	○				
アイヌの言語と文化	2				2	○	○	○	○	○	○	○				
日本文学史 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語				
日本文学史 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語				
日本文学史 III	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語				
日本文学史 IV	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語				
日本史概論 III		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本史概論 IV		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
日本文化史 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語				
日本文化史 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語				
アイヌ文化論 I			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
アイヌ文化論 II			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
宗教文化論			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○				
計		48	24	16	0	88										

2005～2010 年度入学者 適用

2 部

【対象学科欄の記号について】 ○…所属学科で開講されている科目 日語…日本語教員養成課程科目として開講されている科目
×…開講されていない（履修できない）科目

○印必修	授 業 科 目	年次及び単位数					対 象 学 科						備 考	開 講 区 分		
		1	2	3	4	計	法律	政治	経済	地域経済	経営	日本文化			英米文化	
○ ○	言語領域 (言語)															
	言語学 I	2				2	○	○	○	○	○	○	○	必修4単位含み 10単位以上必修	共通基礎科目	
	言語学 II	2				2	○	○	○	○	○	○	共通基礎科目			
	世界言語文化概説	2				2	×	×	○	○	×	○	共通基礎科目			
	専門言語学		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	日語	人文学部英米文化学科専門科目			
	日本語学概論 I	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	人文学部専門科目			
	日本語学概論 II	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	人文学部専門科目			
	日本語学 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	人文学部日本文化学科専門科目			
	日本語学 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	人文学部日本文化学科専門科目			
	日本語史		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	人文学部日本文化学科専門科目			
対照言語学		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	人文学部専門科目				
日本語発声実習	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	人文学部日本文化学科専門科目				
日本語表現法	2				2	日語	日語	日語	日語	日語	○	人文学部日本文化学科専門科目				
言語領域 (外国語)																
オーラルコミュニケーション I	1				1	○	○	○	○	○	○	×	2単位以上必修 英米文化学科以外の学生を対象に開講 英米文化学科の学生のみを対象に開講	共通基礎科目		
オーラルコミュニケーション II	1				1	○	○	○	○	○	○	×		共通基礎科目		
Listening I	1				1	×	×	×	×	×	×	○		人文学部英米文化学科専門科目		
Listening II	1				1	×	×	×	×	×	×	○		人文学部英米文化学科専門科目		
Speaking I	1				1	×	×	×	×	×	×	○		人文学部英米文化学科専門科目		
Speaking II	1				1	×	×	×	×	×	×	○		人文学部英米文化学科専門科目		
教育領域																
コンピュータ科学	2				2	○	○	×	×	×	○	○	必修8単位含み 12単位以上必修	共通基礎科目		
日本語教授法 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目		
日本語教授法 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目		
日本語教授法 III			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目		
日本語教授法 IV			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目		
異文化理解論		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部英米文化学科専門科目		
異文化間教育学		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目		
日本語教育演習 I			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目		
日本語教育演習 II			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目		
社会・文化・地域領域																
コミュニケーション論 I	2				2	○	○	○	○	○	○	○	8単位以上必修	共通基礎科目		
コミュニケーション論 II	2				2	○	○	○	○	○	○	○		共通基礎科目		
日本近現代史論	2				2	○	○	○	○	○	○	○		共通基礎科目		
日本文学	2				2	○	○	○	○	○	○	○		共通基礎科目		
国際事情	2				2	○	○	×	×	○	○	○		共通基礎科目		
アイヌの言語と文化	2				2	○	○	○	○	○	○	○		共通基礎科目		
日本文学史 I		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語		人文学部日本文化学科専門科目		
日本文学史 II		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語		人文学部日本文化学科専門科目		
日本文学史 III		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語		人文学部日本文化学科専門科目		
日本文学史 IV		2			2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語		人文学部日本文化学科専門科目		
日本史概論 III			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	※		人文学部日本文化学科専門科目		
日本史概論 IV			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	※		人文学部日本文化学科専門科目		
日本文化史 I			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語		人文学部日本文化学科専門科目		
日本文化史 II			2		2	日語	日語	日語	日語	日語	○	日語		人文学部日本文化学科専門科目		
アイヌ文化論 I				2	2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目		
アイヌ文化論 II				2	2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目		
宗教文化論				2	2	日語	日語	日語	日語	日語	○	○		人文学部専門科目		
計		42	24	16	0	82										

※2008年度以前入学生は「日語」、2009年度以降入学生は「○」

日本語教員養成課程科目 講義概要索引 (2017年度以降入学生用)

【1部】

必修	学期	曜日	時限	履修コード	授業科目	単位	担当教員名	開講年次	教室	補 足 等	参照頁
	①			-	Communication Skills I	2	-	1		人文学部専門教育科目講義概要参照	-
	②			-	Communication Skills II	2	-	1		人文学部専門教育科目講義概要参照	-
	①	水	5	17115	アイヌ文化論 I	2	高橋 靖以	2	22		19
	②	水	5	17116	アイヌ文化論 II	2	高橋 靖以	2	22		19
	①	月	5	17117	アジア地域論 I	2	小坂みゆき	3	31		20
	②	月	5	17118	アジア地域論 II	2	ダウドジ ヲガマ	3	31		20
	①	金	2	17125	英語学概論 I	2	上野 誠治	2	C31		21
	②	火	5	17126	英語学概論 II	2	米坂スザンヌ	2	C31		22
	②	火	4	17127	英語学特論 I	2	上野 誠治	3	D50		23
	②	火	3	17128	英語学特論 II	2	田中 洋也	3	16		24
	①	水	3	17178	キリスト教文化論	2	佐藤 貴史	2	21		24
	①	月	4	17424	対照言語学	2	呉 泰均	2	32		25
○	①	金	4	17432	日本語学概論 I	2	徳永 良次	1	D30		26
○	②	金	4	17433	日本語学概論 II	2	徳永 良次	1	D30		27
	①	金	2	17434	日本語学特論 I	2	菅 泰雄	3	21		28
	①	木	3	17435	日本語学特論 II	2	徳永 良次	3	AV3		29
	①	火	5	17436	日本語教育演習	2	國岡 洋亮	3	24		29
	①	月	5	17437	日本語教育学特論	2	藤原 安佐	3	23		30
	②	集	3	17438	日本語教育特別演習	2	中川かず子	3	-		31
○	①	金	2	17439	日本語教授法 I	2	中川かず子	2	22		31
○	②	金	2	17440	日本語教授法 II	2	中川かず子	2	22		32
○	①	水	1	17441	日本語教授法 III	2	森 良太	3	AV4		33
○	①	水	2	17442	日本語教授法 III	2	森 良太	3	AV4		33
○	②	水	1	17443	日本語教授法 IV	2	森 良太	3	AV4		34
○	②	水	2	17444	日本語教授法 IV	2	森 良太	3	AV4		34
	①	火	3	17447	日本語発声実習	2	塚原 孝子	1	AV4	初回講義プレースメントテストにて選考	35
	①	火	4	17448	日本語発声実習	2	塚原 孝子	1	AV4	初回講義プレースメントテストにて選考	35
	①	金	2	17457	日本史概論 I	2	追塩 千尋	1	34	英米文化学科は2年次開講	35
	②	金	2	17458	日本史概論 II	2	郡司 淳	1	34	英米文化学科は2年次開講	36
	①	金	4	17461	日本文化概論 I	2	鈴木 英之	1	32	英米文化学科は2年次開講	36
	②	水	5	17462	日本文化概論 II	2	吉村 悠介	1	B42	英米文化学科は2年次開講	37
	①	金	3	17463	日本文学史 I	2	関本 真乃	1	34	英米文化学科は2年次開講	37
	②	月	3	17464	日本文学史 II	2	田中 綾	1	34	英米文化学科は2年次開講	38
	①	土	3	17511	ヨーロッパ文化概論	2	小柳 敦史	2	16		38

※この索引に掲載されていない科目については、一般教育科目用の講義概要を参照してください。

※教室は変更になる場合があります。最新の情報は、G-PLUS!または人文学部事務室にある閲覧用時間割で確認してください。

注 意

講義概要中、上部の「科目名」「単位数」「開講期」「開講年次」欄の括弧内に記載された内容は、2014年度以降入学生には該当しないので注意してください。

【2部】

必修	学期	曜日	時限	履修コード	授業科目	単位	担当教員名	開講年次	教室	補 足 等	参照頁
	①	-	-	-	Communication Skills I	2	-	1	-	人文学部専門教育科目講義概要参照	-
	②	-	-	-	Communication Skills II	2	-	1	-	人文学部専門教育科目講義概要参照	-
	①	水	1	18115	アイヌ文化論Ⅰ	2	高橋 靖以	2	E20		19
	②	水	1	18116	アイヌ文化論Ⅱ	2	高橋 靖以	2	E20		19
	①	月	2	18117	アジア地域論Ⅰ	2	小坂みゆき	3	31		20
	②	月	1	18118	アジア地域論Ⅱ	2	ダウドジラフター	3	22		20
	①	水	2	18125	英語学概論Ⅰ	2	上野 誠治	2	29		21
	②	水	1	18126	英語学概論Ⅱ	2	米坂スザンヌ	2	28		22
	②	水	2	18127	英語学特論Ⅰ	2	上野 誠治	3	29		23
	②	火	1	18128	英語学特論Ⅱ	2	田中 洋也	3	25		24
	①	水	1	18178	キリスト教文化論	2	佐藤 貴史	2	26		25
	②	火	1	18424	対照言語学	2	呉 泰均	2	AV3		26
○	①	水	2	18432	日本語学概論Ⅰ	2	菅 泰雄	1	AV3		27
○	②	木	2	18433	日本語学概論Ⅱ	2	菅 泰雄	1	AV5		28
	①	水	1	18434	日本語学特論Ⅰ	2	菅 泰雄	3	28		28
	①	土	2	18435	日本語学特論Ⅱ	2	徳永 良次	3	AV3		29
○	①	月	2	18439	日本語教授法Ⅰ	2	中川かず子	2	AV4		31
○	②	月	2	18440	日本語教授法Ⅱ	2	中川かず子	2	AV4		32
○	①	木	1	18441	日本語教授法Ⅲ	2	歌代 崇史	3	25		33
○	②	木	1	18442	日本語教授法Ⅳ	2	歌代 崇史	3	25		34
	①	火	1	18436	日本語教育演習	2	國岡 洋亮	3	24		29
	①	月	1	18437	日本語教育学特論	2	藤原 安佐	3	24		30
	②	集	2	18438	日本語教育特別演習	2	中川かず子	3	-		31
	②	火	1	18447	日本語発声実習	2	塚原 孝子	1	AV4	履修希望願を指定された期日までに提出	35
	①	水	1	18457	日本史概論Ⅰ	2	追塩 千尋	1	22	英米文化学科は2年次開講	35
	②	金	1	18458	日本史概論Ⅱ	2	郡司 淳	1	20	英米文化学科は2年次開講	36
	①	金	1	18461	日本文化概論Ⅰ	2	鈴木 英之	1	22	英米文化学科は2年次開講	36
	②	水	1	18462	日本文化概論Ⅱ	2	吉村 悠介	1	C31	英米文化学科は2年次開講	37
	①	木	1	18463	日本文学史Ⅰ	2	関本 真乃	1	D31	英米文化学科は2年次開講	37
	②	木	1	18464	日本文学史Ⅱ	2	田中 綾	1	15	英米文化学科は2年次開講	38
	①	土	1	18511	ヨーロッパ文化概論	2	小柳 敦史	2	C31		38

※この索引に掲載されていない科目については、一般教育科目用の講義概要を参照してください。

※教室は変更になる場合があります。最新の情報は、G-PLUS!または人文学部事務室にある閲覧用時間割で確認してください。

注 意

講義概要中、上部の「科目名」「単位数」「開講期」「開講年次」欄の括弧内に記載された内容は、2014年度以降入学生には該当しないので注意してください。

日本語教員養成課程科目 講義概要索引 (2014～2016 年度入学生用)

【1部】

必修	学期	曜日	時限	履修コード	授業科目	単位	担当教員名	開講年次	教室	補 足 等	参照頁
	①			-	Communication Skills I	2	-	1		人文学部専門教育科目講義概要参照	-
	②			-	Communication Skills II	2	-	1		人文学部専門教育科目講義概要参照	-
	①	水	5	17115	アイヌ文化論 I	2	高橋 靖以	2	22		19
	②	水	5	17116	アイヌ文化論 II	2	高橋 靖以	2	22		19
	①	月	5	17117	アジア地域論 I	2	小坂みゆき	3	31		20
	②	月	5	17118	アジア地域論 II	2	ダウドジ ヲガマ	3	31		20
	①	金	2	17125	英語学概論 I	2	上野 誠治	2	C31		21
	②	火	5	17126	英語学概論 II	2	米坂スザンヌ	2	C31		22
	①	水	3	17178	キリスト教文化論	2	佐藤 貴史	2	21		24
	①	月	4	17424	対照言語学	2	呉 泰均	2	32		25
○	①	金	4	17432	日本語学概論 I	2	徳永 良次	1	D30		26
○	②	金	4	17433	日本語学概論 II	2	徳永 良次	1	D30		27
	①	金	2	17434	日本語学特論 I	2	菅 泰雄	3	21		28
	①	木	3	17435	日本語学特論 II	2	徳永 良次	3	AV3		29
	①	火	5	17436	日本語教育演習	2	國岡 洋亮	3	24		29
	①	月	5	17437	日本語教育学特論	2	藤原 安佐	3	23		30
	②	集	3	17438	日本語教育特別演習	2	中川かず子	3	0		31
○	①	金	2	17439	日本語教授法 I	2	中川かず子	2	22		31
○	②	金	2	17440	日本語教授法 II	2	中川かず子	2	22		32
○	①	水	1	17441	日本語教授法 III	2	森 良太	3	AV4		33
○	①	水	2	17442	日本語教授法 III	2	森 良太	3	AV4		33
○	②	水	1	17443	日本語教授法 IV	2	森 良太	3	AV4		34
○	②	水	2	17444	日本語教授法 IV	2	森 良太	3	AV4		34
	①	火	3	17447	日本語発声実習	2	塚原 孝子	1	AV4	初回講義プレイズメントテストにて選考	35
	①	火	4	17448	日本語発声実習	2	塚原 孝子	1	AV4	初回講義プレイズメントテストにて選考	35
	①	金	2	17457	日本史概論 I	2	追塩 千尋	1	34	英米文化学科は2年次開講	35
	②	金	2	17458	日本史概論 II	2	郡司 淳	1	34	英米文化学科は2年次開講	36
	①	金	4	17461	日本文化概論 I	2	鈴木 英之	1	32	英米文化学科は2年次開講	36
	②	水	5	17462	日本文化概論 II	2	吉村 悠介	1	B42	英米文化学科は2年次開講	37
	①	金	3	17463	日本文学史 I	2	関本 真乃	1	34	英米文化学科は2年次開講	37
	②	月	3	17464	日本文学史 II	2	田中 綾	1	34	英米文化学科は2年次開講	38
	①	土	3	17511	ヨーロッパ文化概論	2	小柳 敦史	2	16		38

※この索引に掲載されていない科目については、一般教育科目用の講義概要を参照してください。

※教室は変更になる場合があります。最新の情報は、G-PLUS!または人文学部事務室にある閲覧用時間割で確認してください。

注 意

講義概要中、上部の「科目名」「単位数」「開講期」「開講年次」欄の括弧内に記載された内容は、2014年度以降入学生には該当しないので注意してください。

【2部】

必修	学期	曜日	時限	履修コード	授業科目	単位	担当教員名	開講年次	教室	補 足 等	参照頁
	①	-	-	-	Communication Skills I	2	-	1	-	人文学部専門教育科目講義概要参照	-
	②	-	-	-	Communication Skills II	2	-	1	-	人文学部専門教育科目講義概要参照	-
	①	水	1	18115	アイヌ文化論 I	2	高橋 靖以	2	E20		19
	②	水	1	18116	アイヌ文化論 II	2	高橋 靖以	2	E20		19
	①	月	2	18117	アジア地域論 I	2	小坂みゆき	3	31		20
	②	月	1	18118	アジア地域論 II	2	ダウドジ ヲガマ	3	22		20
	①	水	2	18125	英語学概論 I	2	上野 誠治	2	29		21
	②	水	1	18126	英語学概論 II	2	米坂スザンヌ	2	28		22
	①	水	1	18178	キリスト教文化論	2	佐藤 貴史	2	26		25
	②	火	1	18424	対照言語学	2	呉 泰均	2	AV3		26
○	①	水	2	18432	日本語学概論 I	2	菅 泰雄	1	AV3		27
○	②	木	2	18433	日本語学概論 II	2	菅 泰雄	1	AV5		28
	①	水	1	18434	日本語学特論 I	2	菅 泰雄	3	28		28
	①	土	2	18435	日本語学特論 II	2	徳永 良次	3	AV3		29
○	①	月	2	18439	日本語教授法 I	2	中川かず子	2	AV4		31
○	②	月	2	18440	日本語教授法 II	2	中川かず子	2	AV4		32
○	①	木	1	18441	日本語教授法 III	2	歌代 崇史	3	25		33
○	②	木	1	18442	日本語教授法 IV	2	歌代 崇史	3	25		34
	①	火	1	18436	日本語教育演習	2	國岡 洋亮	3	24		29
	①	月	1	18437	日本語教育学特論	2	藤原 安佐	3	24		30
	②	集	2	18438	日本語教育特別演習	2	中川かず子	3	-		31
	②	火	1	18447	日本語発声実習	2	塚原 孝子	1	AV4		35
	①	水	1	18457	日本史概論 I	2	追塩 千尋	1	22	英米文化学科は2年次開講	35
	②	金	1	18458	日本史概論 II	2	郡司 淳	1	20	英米文化学科は2年次開講	36
	①	金	1	18461	日本文化概論 I	2	鈴木 英之	1	22	英米文化学科は2年次開講	36
	②	水	1	18462	日本文化概論 II	2	吉村 悠介	1	C31	英米文化学科は2年次開講	37
	①	木	1	18463	日本文学史 I	2	関本 真乃	1	D31	英米文化学科は2年次開講	37
	②	木	1	18464	日本文学史 II	2	田中 綾	1	15	英米文化学科は2年次開講	38
	①	土	1	18511	ヨーロッパ文化概論	2	小柳 敦史	2	C31		38

※この索引に掲載されていない科目については、一般教育科目用の講義概要を参照してください。

※教室は変更になる場合があります。最新の情報は、G-PLUS!または人文学部事務室にある閲覧用時間割で確認してください。

注 意

講義概要中、上部の「科目名」「単位数」「開講期」「開講年次」欄の括弧内に記載された内容は、2014年度以降入学生には該当しないので注意してください。

科目名	アイヌ文化論Ⅰ		
担当者	高橋 靖以		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部2年 日・英・日語 2部2年 日・英・日語 (1部2年 日・英・日語 2部3年 日・英・日語)		

●授業のねらい
(授業のテーマ)

日本列島の先住民族であるアイヌの言語と文化には、現在国際的に大きな関心が寄せられています。この講義では、アイヌの文化に関し、文化人類学や言語学、口頭伝承研究の立場から様々なトピックを取り上げ議論を展開します。講義では、特に文化と言語の関りを重視し、「言語からみた文化」を探ることを一つのテーマとします。

この講義は2年生を対象とした環境文化の基礎・展開科目です。
(学習目標)

講義で取り上げる様々なトピックを通して、アイヌ文化研究の諸問題に関する理解を深めることを目標とします。また、文化人類学や言語学の考え方を理解し、具体的な議論が構築できるようになることも講義の目標の一つです。

●授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 環境人類学からみたアイヌ文化
- 第3回 アイヌ文化成立論とその問題点
- 第4回 現代のアイヌ文化をめぐる諸問題
- 第5回 アイヌ語の地域差と歴史
- 第6回 アイヌ語の現状とドキュメンテーション
- 第7回 言語人類学からみたアイヌ文化
- 第8回 時間の表現からみたアイヌ文化
- 第9回 空間の表現からみたアイヌ文化
- 第10回 アイヌ語地名とその研究の諸問題
- 第11回 民俗分類からみたアイヌ文化
- 第12回 親族名称からみたアイヌ文化
- 第13回 数の表現からみたアイヌ文化
- 第14回 色彩の表現からみたアイヌ文化
- 第15回 まとめ

●準備学習の内容

講義中に指示する参考文献に基づき、毎回の予習と学習内容のまとめをおこなってください。

●評価方法・基準

講義中に指示する課題(20%)と定期試験(80%)で評価をおこないます。課題の実施結果については講義内でコメントします。

●履修上の留意点

特になし。

●教科書

特になし。

●参考書

講義中に指示します。

科目名	アイヌ文化論Ⅱ		
担当者	高橋 靖以		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部2年 日・英・日語 2部2年 日・英・日語 (1部2年 日・英・日語 2部3年 日・英・日語)		

●授業のねらい
(授業のテーマ)

日本列島の先住民族であるアイヌの言語と文化には、現在国際的に大きな関心が寄せられています。この講義では、アイヌの文化に関し、文化人類学や言語学、口頭伝承研究の立場から様々なトピックを取り上げ議論を展開します。講義では、特にアイヌの口頭伝承を取り上げ、その文化的・歴史的背景を探っていきます。この講義は2年生を対象とした環境文化の基礎・展開科目です。
(学習目標)

講義で取り上げる様々なトピックを通して、アイヌ文化研究の諸問題に関する理解を深めることを目標とします。また、文化人類学や言語学の考え方を理解し、具体的な議論が構築できるようになることも講義の目標の一つです。

●授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 アイヌ口頭伝承とその分類
- 第3回 アイヌの歌謡とその分類
- 第4回 呪文、祈詞、謎々などの口頭伝承
- 第5回 神謡の形式とその内容
- 第6回 神謡からみたアイヌ文化
- 第7回 散文説話の形式とその内容
- 第8回 散文説話と歴史研究
- 第9回 事実談とその内容
- 第10回 英雄叙事詩の形式とその内容
- 第11回 英雄叙事詩と歴史研究
- 第12回 アイヌ口頭伝承の構成に関する諸問題
- 第13回 アイヌ口頭伝承と近現代のアイヌ文学
- 第14回 現代におけるアイヌ口頭伝承
- 第15回 まとめ

●準備学習の内容

講義中に指示する参考文献に基づき、毎回の予習と学習内容のまとめをおこなってください。

●評価方法・基準

講義中に指示する課題(20%)と定期試験(80%)で評価をおこないます。課題の実施結果については講義内でコメントします。

●履修上の留意点

特になし。

●教科書

特になし。

●参考書

講義中に指示します。

科目名	アジア地域論Ⅰ (アジア文化論Ⅰ)		
担当者	小坂みゆき		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部3年 日・英 2部3年 日・英 (1部3年 日・英・日語 2部 英)		

●授業のねらい
(授業のテーマ)

アジアにおける人々の暮らしの移り変わり、それらが相互の影響を受けながら独自に発展、変遷して今日に至っていることを各地域の文化を通して学ぶ。アジアの人々の暮らしのすがたは、その地域での環境的背景や社会的背景などで様々だが、の中には西洋とは異なる共通性を見ることが出来る。暮らしの移り変わりを時間的歴史的な流れのなかで見えていくことを縦軸とし、それぞれの地域の同時期での暮らしの姿を見ていくことを横軸として、相違点や共通性、それが生じる要因について具体的な事例をとりあげて考察する。

講義は日本、韓国、中国の東アジア地域を中心とするが、それ以外のアジアの地域についても触れていく。15回の講義は、食文化、衣文化、儒教文化、人生儀礼という流れで進めていく。

この科目は、3年生以上を対象とした環境文化の展開科目である。

(学習目標)

- ①日本、中国、韓国の暮らしの姿がどのように形成されてきたかを文化を通して理解する。
- ②互いに影響しあってきたことを具体的な事例から学ぶ。
- ③グローバル化により世界に広げられた文化の平均化と対比し東アジア地域の共通点と相違点を理解する。

●授業計画

- 第1回 講義の方針：導入
 第2回 アジアの人々の生活と食－①嗜好品の文化
 第3回 アジアの人々の生活と食－②スパイス・調味料の文化
 第4回 アジアの人々の生活と食－③保存食と発酵食品
 第5回 アジアの人々の生活と食－④社会化した保存食
 第6回 アジアの人々の生活と食－⑤共食文化
 第7回 アジアの人々の生活と衣服－①民族衣装とは
 第8回 アジアの人々の生活と衣服－②民族衣装の変容－中国の民族衣装とは
 第9回 アジアの人々の食文化・衣文化のまとめ
 第10回 アジアにおける儒教－①日本、韓国、中国
 第11回 アジアにおける儒教と人生儀礼－②祖先崇拜
 第12回 アジアにおける儒教と人生儀礼－③結婚式・還暦祝
 第13回 アジアにおける年中行事－日本、韓国、中国
 第14回 国境を越える人々－中国のコリアン
 第15回 まとめ

●準備学習の内容

- ①日ごろから、テレビや新聞などの記事に注意し、アジア地域への興味、関心をもつ。
- ②小テスト、レポートの準備を行う。

●評価方法・基準

- ①中間に行う小テスト(20%)、レポート(80%)で評価します。
- ②受講態度も成績に加味します。
- ③小テストの講評は講義内で行います。

●履修上の留意点

授業は講義形式で行うが、映像資料を用いて出席者への質問やコメントを織り交ぜてすすめます。
日頃から新聞などメディアで報道されるアジアに関する話題に触れ、関心を持つようにしましょう。

●教科書

特になし。必要に応じてプリントを配布する。

●参考書

必要に応じて紹介する。

科目名	アジア地域論Ⅱ (アジア文化論Ⅱ)		
担当者	ダグワドルジ ラワダマー		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部3年 日・英 2部3年 日・英 (1部3年 日・英・日語 2部 英)		

●授業のねらい
(授業のテーマ)

アジア地域の人々の生活と社会について学ぶ。その内、モンゴル研究を事例として、日本との共通点と相違点を比較しながら考察する。

この科目は、3年生以上を対象とした展開科目である。

(学習目標)

異文化であるアジアの他地域への理解を深めるとともに、アジア地域構成員の一人としての自己の位置づけを知る。

●授業計画

- 第1回 講義の概要
必ず出席すること。単位取得には、各回授業でグループ・ディスカッションに参加、課題提出が必要。毎回の課題はe-learningとして提出するが、提出方法は第1回講義で説明する。
- 第2回 日本とモンゴルの関係、発表分担
必ず出席すること。以後の授業で発表を行う班と担当回を決める。万一欠席する場合は、自身で他の受講者と交渉して班に入る。
- 第3回 遊牧生活
第4回 教育、労働、ジェンダー
第5回 観光
第6回 ファッション、音楽
第7回 宗教と社会
第8回 社会主義と民主化
第9回 市場経済化・私有化
第10回 牧畜経済
第11回 鉱業経済
第12回 産業
第13回 環境問題(草原)
第14回 環境問題(都市)
第15回 まとめ

●準備学習の内容

毎週、教科書の該当部分を読んでくること(範囲は講義時に指示)。授業内容に関する日本についてのことにテレビや新聞などの記事に注意する。発表担当回には、班員と協力して、発表準備をおこなうこと。

毎授業後に小レポート(e-learning)を提出すること。

●評価方法・基準

平常点[授業への取り組み・小レポート(e-learning)・発表]65%、期末点35%により総合的に評価する。期末試験の受験は必須。

小レポート課題の結果については、中盤以降の授業内で発表する。

発表課題は次回以降に返却する。期末試験は返却しない。

●履修上の留意点

上記の内容を中心とした15回の講義を行います。内容は学習状況に応じて調整する。

15週のうち1-2週をオンライン(e-learning)にて実施予定。

●教科書

小長谷有紀・前川愛編著『現代モンゴルを知るための50章』明石書店、2014年。

●参考書

適宜プリントを配付します。

科目名	英語学概論 I		
担当者	上野 誠治		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部2年 日・英・日語 2部2年 日・英・日語		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

主として、英語学および言語学の形式的な側面を研究する際に必要となる基礎概念とその研究方法を学ぶ。音韻論、形態論、統語論、意味論などの主要な分野における基本的な考え方を紹介することによって、普段、コミュニケーションの道具として使用している英語の「隠れた仕組み」に気づくことをねらいとする。

この科目は、2年生以上を対象とした言語文化の基礎科目です。(学習目標)

- (1) 英語学の基礎となる知識や思考法、研究方法を身につける。
- (2) 英語の背後に潜む規則性や原理の探求の醍醐味に触れる。
- (3) 実際に英語を使う場面や英語教育での応用を学ぶ。

●授業計画

- 第1回 ガイダンス：英語学と言語学
音韻論①—母音と子音
- 第2回 音韻論②—音節とモーラ、アクセント、イントネーション
- 第3回 形態論①—屈折形態論と派生形態論
- 第4回 形態論②—派生と複合
- 第5回 生成統語論①—句構造、名詞句
- 第6回 生成統語論②—移動
- 第7回 機能的構文論①—文の情報構造
- 第8回 機能的構文論②—視点
- 第9回 語彙意味論①—意味関係、多義
- 第10回 語彙意味論②—可算名詞と不可算名詞、意味役割
- 第11回 認知意味論①—カテゴリー化とプロトタイプ、メトニミー
- 第12回 認知意味論②—抽象概念とメタファー、概念融合
- 第13回 語用論①—発話の論理形式、表意
- 第14回 語用論②—推意、記述的使用と帰属的使用
- 第15回 古英語から国際共通語へ至る歴史の変遷

●準備学習の内容

前回までの講義概要（特に、基礎的概念）をよく復習しておくこと。

●評価方法・基準

定期試験（80％）と授業への参加状況（20％）で評価する。
試験の結果は、学習支援システム上で確認すること。

●履修上の留意点

全回出席し、真剣に取り組むことを前提とする。

基礎概念を土台にして議論が展開していくので、新出の概念・定義・原理などはよく理解しておく必要がある。わからないままにしておくのではなく、適宜参考文献に当たって理解を深めておく必要がある。

●教科書

三原健一、高見健一（編著）『日英対照 英語学の基礎』くろしお出版.2013年.

●参考書

大津由紀雄（編著）『はじめて学ぶ言語学—ことばの世界をさぐる17章』ミネルヴァ書房

大津由紀雄ほか『言語研究入門』研究社

中島平三『ファンダメンタル英語学』改訂版、ひつじ書房

郡司隆男、西河内泰介『ことばの科学ハンドブック』研究社

科目名	英語学概論Ⅱ		
担当者	米坂 スザンヌ		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部2年 日・英・日語 2部2年 日・英・日語		

●授業のねらい
(授業のテーマ)

This course will help you understand some mechanisms underlying spoken English communication and develop conversation analysis skills for use in seminars. In class, students analyze linguistic data in small groups.

これからの学生生活のために(専門教育の学習を含む)話し言葉の主要概念について理解し、基本的な会話分析スキルを習得する。授業では、学生が小グループで言語データを分析します。2年生を対象とした言語文化の基礎科目です。

(学習目標)

After taking this course you will be able to:

- (1) Recall key concepts in pragmatics, conversation analysis, and sociolinguistics (Knowledge)
 - (2) Apply these key concepts to basic analysis of linguistic data (Thought)
 - (3) Relate these concepts to your daily communication (Behavior, Appreciation)
- (1) 語用論, 会話分析, 社会言語学の主要概念を想起する(知識)
(2) 理解した主要概念を利用し, 言語データを分析する(思考)
(3) これらの主要概念を日常コミュニケーションに関連させる(態度, 意欲)

●授業計画

- 第1回 Orientation / オリエンテーション
第2回 Linguistic fundamentals / 言語の基礎
第3回 Semantics / 意味論
第4回 Deixis / 直示性
第5回 Speech acts / 発話行為
第6回 Gricean pragmatics / グライスにおける語用論
第7回 Ambiguity / 文法的曖昧性・語彙的曖昧性
第8回 Turn-taking / 発言交替
第9回 Conversation / 会話
第10回 Politeness / 丁寧性
第11回 Status and connection / 社会的地位と社会的繋がり
第12回 Language and gender / 言語とジェンダー
第13回 Learning gendered language / 性別言語を取得する
第14回 Prestige / 威信
第15回 Social dialects / 社会方言

●準備学習の内容

This is a flipped class. Before class, students (1) download, then complete an outline while watching an online video lecture, (2) take an on-line quiz using the outline as support, (3) upload any questions they may have.

反転授業です。授業の前、学生は(1)ビデオ講義を見ながらダウンロードしたオンラインを完成します(2)アウトラインを見ながらオンラインクイズを受けます(3)理解不足、疑問点等をアップロードします。

●評価方法・基準

Pre-class online quizzes: 50% (Objective 1)

In-class small group work: 50% (Objective 2, 3)

Grades for pre-class online quizzes will be displayed on the course LMS. In-class work will receive feedback directly from the instructor. Grades for in-class work will be displayed on the course LMS.

事前オンラインテスト: 50% (対応目標1)
授業中の小グループワーク: 50% (対応目標2,3)
オンラインテストの評価はLMSで掲示されます。授業中の提出物に関しては担当教員から直接コメントがありますし、評価はLMSで掲示されます

●履修上の留意点

Class will be conducted primarily in English.
クラスは主に英語で行われます。

●教科書

All materials are available on the course website.
特になし。すべての資料は、コースのウェブサイトです。

●参考書

特になし。

科目名	英語学特論 I (英語学 I)		
担当者	上野 誠治		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部3年 日・英 2部3年 日・英 (1部3年 英 2部3年 英)		

●授業のねらい
(授業のテーマ)

今から約2000年前、シーザーがブリテン島に上陸した頃、英語はまだ言葉として存在していなかったが、その後様々な歴史の変遷を経て、今日の地球語としての地位を獲得するに至っている。本講義では、古英語、中英語、近代英語の歴史の変遷を学びながら、現代英語に至るまでの経緯を辿る。

この科目は、3年生以上を対象とした英米文化学科の展開科目です。日本文化学科の学生は、4科目8単位まで卒業単位として認定されます。

(学習目標)

1. 英語の歴史の変遷を理解することが出来る。
2. 古英語、中英語、近代英語の語彙・特徴・文法を理解することが出来る。
3. 「地球語としての英語」の成立過程を理解することが出来る。

●授業計画

- 第1回 ガイダンス、古英語以前の歴史、インド・ヨーロッパ祖語
- 第2回 グリムの法則、ヴェルネルの法則
- 第3回 古英語の時代：アングロ・サクソン人
- 第4回 古英語の文字、発音、語彙、特徴、方言
- 第5回 古英語の文法①：名詞、動詞
- 第6回 古英語の文法②：形容詞、語順の重要性
- 第7回 古英語の文法③：主格、属格、与格、対格の用法
- 第8回 古英語の文法④：代名詞、指示詞、動詞の活用、過去現在動詞
- 第9回 中英語の時代：ノルマン征服
- 第10回 中英語の文字、発音、語彙、特徴、方言
- 第11回 近代英語の文法、英語の標準化、辞書の編纂、綴り字と発音の乖離
- 第12回 中英語の文法：名詞、形容詞、動詞、冠詞、代名詞、前置詞、語順
- 第13回 近代英語の時代：活版印刷、ルネサンス
- 第14回 近代英語の語彙、特徴
- 第15回 まとめ

●準備学習の内容

特に指示しない限り、予習の必要はないが、前回までの授業内容を十分復習しておくこと。

●評価方法・基準

定期試験(80%)と授業への参加状況(20%)で評価する。試験の結果は、学習支援システム上で確認すること。

●履修上の留意点

特別な理由がない限り全回出席し、真剣に取り組むこと。「英語という言葉」の歴史を学ぶ。英語で書かれた資料を読むこともある。現代英語とは異なる古英語や中英語に興味・関心を持った学生の受講が望ましい。

●教科書

学習支援システム上で講義用資料を配布する。各自プリントアウトして授業に出席すること。初回は、担当教員がプリントを用意する。

●参考書

特になし。

科目名	英語学特論 I (英語学)		
担当者	上野 誠治		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部3年 日・英 2部3年 日・英 (1部3年 英 2部3年 英)		

●授業のねらい
(授業のテーマ)

今から約2000年前、シーザーがブリテン島に上陸した頃、英語はまだ言葉として存在していなかったが、その後様々な歴史の変遷を経て、今日の地球語としての地位を獲得するに至っている。本講義では、古英語、中英語、近代英語の歴史の変遷を学びながら、現代英語に至るまでの経緯を辿る。

この科目は、3年生以上を対象とした英米文化学科の展開科目です。日本文化学科の学生は、4科目8単位まで卒業単位として認定されます。

(学習目標)

1. 英語の歴史の変遷を理解することが出来る。
2. 古英語、中英語、近代英語の語彙・特徴・文法を理解することが出来る。
3. 「地球語としての英語」の成立過程を理解することが出来る。

●授業計画

- 第1回 ガイダンス、古英語以前の歴史、インド・ヨーロッパ祖語
- 第2回 グリムの法則、ヴェルネルの法則
- 第3回 古英語の時代：アングロ・サクソン人
- 第4回 古英語の文字、発音、語彙、特徴、方言
- 第5回 古英語の文法①：名詞、動詞
- 第6回 古英語の文法②：形容詞、語順の重要性
- 第7回 古英語の文法③：主格、属格、与格、対格の用法
- 第8回 古英語の文法④：代名詞、指示詞、動詞の活用、過去現在動詞
- 第9回 中英語の時代：ノルマン征服
- 第10回 中英語の文字、発音、語彙、特徴、方言
- 第11回 中英語の文法：名詞、形容詞、動詞、冠詞、代名詞、前置詞、語順
- 第12回 近代英語の時代：活版印刷、ルネサンス
- 第13回 近代英語の語彙、特徴
- 第14回 近代英語の文法、英語の標準化、辞書の編纂、綴り字と発音の乖離
- 第15回 まとめ

●準備学習の内容

特に指示しない限り、予習の必要はないが、前回までの授業内容を十分復習しておくこと。

●評価方法・基準

定期試験(80%)と授業への参加状況(20%)で評価する。試験の結果は、学習支援システム上で確認すること。

●履修上の留意点

特別な理由がない限り全回出席し、真剣に取り組むこと。「英語という言葉」の歴史を学ぶ。英語で書かれた資料を読むこともある。現代英語とは異なる古英語や中英語に興味・関心を持った学生の受講が望ましい。

●教科書

学習支援システム上で講義用資料を配布する。各自プリントアウトして授業に出席すること。初回は、担当教員が用意する。

●参考書

特になし。

科目名	英語学特論Ⅱ (専門言語学Ⅰ) (専門言語学)		
担当者	田中 洋也		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部3年 日・英 2部3年 日・英 (1部3年 英・日語 2部3年 英・日語)		

●授業のねらい
(授業のテーマ)

言語習得の理論と研究方法を学び、グループでのリサーチプロジェクトを行うことで、言語学、心理学、教育学に基づいた外国語教育や第二言語習得研究を行う基本的知識、技法を身につけることを目的とする。

3年生以上を対象とした英米文化学科の展開科目です。日本文学文化学科の学生は、4科目8単位まで卒業要件として認定されます。(学習目標)

1. 言語習得研究の特徴を理解し、説明ができる。
2. 言語学、心理学、教育学に基づいた第二言語習得研究の特徴を理解し、説明できる。
3. 第二言語習得研究における研究技法を理解し、運用することができる。
4. グループで協調して研究設計、実施ができる。

●授業計画

- 第1回 オリエンテーション・第二言語習得
第2回 母語獲得
第3回 言語音の知覚と語の獲得
第4回 文の獲得
第5回 インプットの役割
第6回 言語獲得理論
第7回 中間言語
第8回 第二言語習得のメカニズム
第9回 学習者要因
第10回 教室における第二言語習得研究
第11回 リサーチプロジェクト1 「研究課題」
第12回 リサーチプロジェクト2 「文献研究」
第13回 リサーチプロジェクト3 「研究設計」
第14回 リサーチプロジェクト4 「調査実施・考察」
第15回 リサーチプロジェクト5 「発表」

●準備学習の内容

第10週までは、教科書の各章を事前に読んで各自の考察に基づく授業課題を提出する。第11週以降は、関心を同じにするグループによるリサーチプロジェクトのための作業を協調して行う。

●評価方法・基準

授業課題50%、授業活動20%、リサーチプロジェクト30%

●履修上の留意点

第1回授業には必ず出席する。

●教科書

鈴木孝明・白畑知彦「ことばの習得 — 母語獲得と第二言語習得」くろしお出版

●参考書

竹内理・水本篤「外国語教育研究ハンドブック—研究手法のより良い理解のために」松柏社

科目名	キリスト教文化論 (宗教文化論Ⅰ)		
担当者	佐藤 貴史		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部2年 日・英・日語		

●授業のねらい
(授業のテーマ)

英米ならびにヨーロッパ文化を考えると、キリスト教の存在を無視することはできないため、本講義ではユダヤ教とキリスト教の形成過程、『旧約聖書』と『新約聖書』の内容を歴史的に理解することを目的とする。キリスト教は、さまざまな文化と融合・対立しながら独自の文化を形成してきており、その重要な原動力の一つに『聖書』の思想があったと考えられる。それゆえ、本講義では主に『旧約聖書』と『新約聖書』の内容が取り扱われる。

2年生以上を対象とした思想文化の基礎科目である。

(学習目標)

1. 英米文化に限らず人間社会の基礎となっている〈宗教〉、とくにユダヤ教とキリスト教が、どのような過程で生まれ、今日まで伝わってきたかを確認する。
2. 現代世界における対立の火種のひとつにも数えられる〈宗教〉の基本的知識を具体的に述べることができる。
3. キリスト教文化を材料としながら、物事の因果関係や複雑な現象について明晰に説明できる力をつける。
4. ユダヤ教とキリスト教に関する宗教文化的視点に基づいて、非キリスト教圏の諸文化との類似性や違いを見つけることができる。

●授業計画

- 第1回 キリスト教を通して文化を考える
第2回 創造する神(『旧約聖書』の思想1)
第3回 人間の罪(『旧約聖書』の思想2)
第4回 神の試練(『旧約聖書』の思想3)
第5回 モーセの召命(『旧約聖書』の思想4)
第6回 神によるユダヤ人の解放(『旧約聖書』の思想5)
第7回 神から与えられた法(『旧約聖書』の思想6)
第8回 ユダヤ教の批判者イエス(『新約聖書』の思想1)
第9回 イエスの受難(『新約聖書』の思想2)
第10回 ユダヤ教とイエスの描き方—ドイツとフランスの例
第11回 隣人とは誰か(『新約聖書』の思想3)
第12回 終末論と「この世界」(『新約聖書』の思想4)
第13回 終わらない世界(『新約聖書』の思想5)
第14回 神が人になる—絵画を題材として(『新約聖書』の思想6)
第15回 古代から中世へ

●準備学習の内容

以下の内容を踏まえて、30分以上、予習復習をすることが望ましい。

1. 自分の生活の中に根づいている〈宗教的なもの〉を少しだけ意識して、そこから関心を広げること。
2. 参考書や新聞の中でふれられている宗教的なテーマにもできるだけ注意を向けること。

●評価方法・基準

複数回の小テスト(40%)、期末試験(60%)で評価する。

●履修上の留意点

世界史の知識も必要になるので、不安な人は高校レベルのものでよいので復習しておいてほしい。

●教科書

特になし。プリントを配布する。

●参考書

- 島蘭進 他=編『宗教学キーワード』(有斐閣、2006年)。
市川裕=著『ユダヤ教の歴史』(山川出版社、2009年)。
松本宣郎=編『キリスト教の歴史1』(山川出版社、2009年)。
高柳俊一 他=編『キリスト教の歴史2』(山川出版社、2009年)。
佐藤次高=編『イスラームの歴史1』(山川出版社、2010年)。
小杉泰=編『イスラームの歴史2』(山川出版社、2010年)。

科目名	キリスト教文化論		
担当者	佐藤 貴史		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	2部2年 日・英・日語		

●授業のねらい
(授業のテーマ)

英米ならびにヨーロッパ文化を考えると、キリスト教の存在を無視することはできないため、本講義ではユダヤ教とキリスト教の形成過程、『旧約聖書』と『新約聖書』の内容を歴史的に理解することを目的とする。キリスト教は、さまざまな文化と融合・対立しながら独自の文化を形成してきており、その重要な原動力の一つに『聖書』の思想があったと考えられる。それゆえ、本講義では主に『旧約聖書』と『新約聖書』の内容が取り扱われる。

2年生以上を対象とした思想文化の基礎科目である。

(学習目標)

1. 英米文化に限らず人間社会の基礎となっている〈宗教〉、とくにユダヤ教とキリスト教が、どのような過程で生まれ、今日まで伝わってきたかを確認する。
2. 現代世界における対立の火種のひとつにも数えられる〈宗教〉の基本的知識を具体的に述べることができる。
3. キリスト教文化を材料としながら、物事の因果関係や複雑な現象について明晰に説明できる力をつける。
4. ユダヤ教とキリスト教に関する宗教文化的視点に基づいて、非キリスト教圏の諸文化との類似性や違いを見つめることができる。

●授業計画

- 第1回 キリスト教を通して文化を考える
- 第2回 創造する神(『旧約聖書』の思想1)
- 第3回 人間の罪(『旧約聖書』の思想2)
- 第4回 神の試練(『旧約聖書』の思想3)
- 第5回 モーセの召命(『旧約聖書』の思想4)
- 第6回 神によるユダヤ人の解放(『旧約聖書』の思想5)
- 第7回 神から与えられた法(『旧約聖書』の思想6)
- 第8回 ユダヤ教の批判者イエス(『新約聖書』の思想1)
- 第9回 イエスの受難(『新約聖書』の思想2)
- 第10回 ユダヤ教とイエスの描き方——ドイツとフランスの例
- 第11回 隣人とは誰か(『新約聖書』の思想3)
- 第12回 終末論と「この世界」(『新約聖書』の思想4)
- 第13回 終わらない世界(『新約聖書』の思想5)
- 第14回 神が人になる——絵画を題材として(『新約聖書』の思想6)
- 第15回 古代から中世へ

●準備学習の内容

以下の内容を踏まえて、30分以上、予習復習をすることが望ましい。

1. 自分の生活の中に根づいている〈宗教的なもの〉を少しだけ意識して、そこから関心を広げること。
2. 参考書や新聞の中でふれられている宗教的なテーマにもできるだけ注意を向けること。

●評価方法・基準

複数回の小テスト(40%)、期末試験(60%)で評価する。

●履修上の留意点

世界史の知識も必要になるので、不安な人は高校レベルのものでよいので復習しておいてほしい。

●教科書

特になし。プリントを配布する。

●参考書

島菌進 他=編『宗教学キーワード』(有斐閣, 2006年)。
市川裕=著『ユダヤ教の歴史』(山川出版社, 2009年)。
松本宣郎=編『キリスト教の歴史1』(山川出版社, 2009年)。
高柳俊一 他=編『キリスト教の歴史2』(山川出版社, 2009年)。
佐藤次高=編『イスラームの歴史1』(山川出版社, 2010年)。
小杉泰=編『イスラームの歴史2』(山川出版社, 2010年)。

科目名	対照言語学 (対照言語学 I)		
担当者	呉 泰均		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部2年 日・英・日語		

●授業のねらい
(授業のテーマ)

ことばを表現する立場に立った視点から日本語のさまざまな側面を全般的に取り上げ、日本語をめぐる諸問題を他言語と比較対照することで、言語の普遍性をさぐると同時に、言語の特性を学問的に取り扱うための基礎的な力を身につけていく。

この科目は、2年生以上を対象とした、言語文化の基礎科目である。

(学習目標)

音声、文字、単語、表記といった言語の仕組みとしての側面、ジェンダー、年齢、方言といった社会言語学的な側面、社会構造を反映した敬語や配慮表現、文末表現といった対人的側面にかかわる次元まで、言語の全般にわたって日本語を科学的に分析する力や対照言語学的知見を身につけることができる。

●授業計画

- 第1回 対照言語学とは何か
比較言語学との相違点
- 第2回 言語と言語学
ことばの世界をさぐる
- 第3回 外から見る日本語
世界の中の言語
- 第4回 音声学と音韻論1
日本語と韓国語の音声学的特徴
- 第5回 音声学と音韻論2
日本語の音韻、アクセントと音調
- 第6回 ことばの社会言語学的側面
日本語における社会方言と地域方言
- 第7回 言語学的基礎知識1
対照言語学的観点からみる形態論
- 第8回 言語学的基礎知識2
対照言語学的観点からみる統語論
- 第9回 語用論の世界1
言語の対人関係性・対人的機能、言語行為
- 第10回 語用論の世界2
コミュニケーションの仕組み
- 第11回 日本語と他アジア言語の運用特性比較対照
- 第12回 敬語と待遇表現
日本語と韓国語の比較対照
- 第13回 Brown&Levinsonのポライトネス理論
言語行動における丁寧さ・配慮の対照言語学的解釈可能性
- 第14回 日本語コミュニケーションへのこだわり
- 第15回 異文化コミュニケーション
日本語・英語・中国語・韓国語における言語行動の比較対照

●準備学習の内容

毎回授業中に説明する専門用語(言語学・日本語学)の意味などを理解しておくこと。

●評価方法・基準

成績評価は、主として学期末レポート(80%)によるが、授業態度などによる平常点(20%)も加えて総合的に評価する。

●履修上の留意点

授業中の私語など、他人に迷惑となる行為は控えていただきたい。
毎回配布するハンドアウトを必ず持参すること。

●教科書

特定の教科書は用いない。毎回ハンドアウトを配布する。

●参考書

佐久間淳一・加藤重広・町田健 『言語学入門』 研究社
金田一春彦 『日本語(上)』 岩波新書
金田一春彦 『日本語(下)』 岩波新書

科目名	対照言語学		
担当者	呉 泰均		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	2部2年 日・英・日語		

●授業のねらい
(授業のテーマ)

ことばを表現する立場に立った視点から日本語のさまざまな側面を全般的に取り上げ、日本語をめぐる諸問題を他言語と比較対照することで、言語の普遍性をさぐると同時に、言語の特性を学問的に取り扱うための基礎的な力を身につけていく。

この科目は、2年生以上を対象とした言語文化の基礎科目である。

(学習目標)

音声、文字、単語、表記といった言語の仕組みとしての側面、ジェンダー、年齢、方言といった社会言語学的な側面、社会構造を反映した敬語や配慮表現、文末表現といった対人的側面にかかわる次元まで、言語の全般にわたって日本語を科学的に分析する力や対照言語学の知見を身につけることができる。

●授業計画

- 第1回 対照言語学とは何か
比較言語学との相違点
- 第2回 言語と言語学
ことばの世界をさぐる
- 第3回 外から見る日本語
世界の中の言語
- 第4回 音声学と音韻論1
日本語と韓国語の音声学的特徴
- 第5回 音声学と音韻論2
日本語の音韻、アクセントと音調
- 第6回 ことばの社会言語学的側面
日本語における社会方言と地域方言
- 第7回 言語学的基礎知識1
対照言語学的観点からみる形態論
- 第8回 言語学的基礎知識2
対照言語学的観点からみる統語論
- 第9回 語用論の世界1
言語の対人関係性・対人的機能、言語行為
- 第10回 語用論の世界2
コミュニケーションの仕組み
- 第11回 日本語と他アジア言語の運用特性比較対照
- 第12回 敬語と待遇表現
日本語と韓国語の比較対照
- 第13回 Brown&Levinsonのボライトネス理論
言語行動における丁寧さ・配慮の対照言語学的解釈可能性
- 第14回 日本語コミュニケーションへのこだわり
- 第15回 異文化コミュニケーション
日本語・英語・中国語・韓国語における言語行動の比較対照

●準備学習の内容

毎回授業中に説明する専門用語（言語学・日本語学）の意味などを理解しておくこと。

●評価方法・基準

成績評価は、主として学期末レポート（80％）によるが、授業態度などによる平常点（20％）も加えて総合的に評価する。

●履修上の留意点

授業中の私語など、他人に迷惑となる行為は控えていただきたい。

毎回配布するハンドアウトを必ず持参すること。

●教科書

特定の教科書は用いない。毎回ハンドアウトを配布する。

●参考書

佐久間淳一・加藤重広・町田健 『言語学入門』 研究社
金田一春彦 『日本語（上）』 岩波新書
金田一春彦 『日本語（下）』 岩波新書

科目名	日本語学概論 I		
担当者	徳永 良次		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部1年 日・英・日語		

●授業のねらい
(授業のテーマ)

日本語研究入門

日本語の音声・音韻・文字・表記・語彙・文法などについて学ぶ。特に、普段「無意識に」使用している日本語の構造や特徴について、なるべく身近な話題を盛り込んで進めていく。

1年生以上を対象とした基礎科目です。

(学習目標)

日本語の音韻・文字・表記等について理論的かつ系統的に学習することで普段何気なく使っている日本語への理解を深める。

●授業計画

- 第1回 言語の機能
- 第2回 言語記号の恣意性
- 第3回 音声と音韻
- 第4回 音素・単音
- 第5回 母音
- 第6回 子音 ハ行子音
- 第7回 子音 清濁 四つ仮名
- 第8回 アクセント
- 第9回 日本語表記の特色
- 第10回 かな
- 第11回 漢字
- 第12回 ローマ字
- 第13回 表記をめぐる諸問題
- 第14回 仮名づかい
- 第15回 まとめ

●準備学習の内容

日本語に関心を持ち、いろいろなことに目を向ける「知的好奇心」を持っていることが必要。「概論」という科目名ではあるが、かなり専門的な内容である。従って、事前の予習と事後の適切な復習が欠かせない。

●評価方法・基準

試験（80点）、平常点（20点）。平常点とは、ただ出席しているだけではなく、適宜課題を出して、調査・研究して発表してもらうことも考えており、それへの質疑状況などを主要な評価の対象とする。

●履修上の留意点

「概論」であるが日本語系科目としては最も難しいものである。安易な履修をせず、将来日本語学系のゼミを希望する者の履修が望ましい。

●教科書

藤田保幸『緑の日本語学教本』和泉書院

●参考書

必要に応じて講義中に言及する

科目名	日本語学概論Ⅰ		
担当者	菅 泰雄		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	2部1年 日・英・日語		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

日本語研究入門

日本語の音声・音韻・文字表記などについて学ぶ。特に、普段「無意識に」使用している日本語の構造や特徴について、なるべく身近な話題を盛り込んで進めていく。

教職(国語)、日本語教員養成課程の必修科目である。

1年生以上を対象とした基礎科目である。

(学習目標)

日本語の音韻・文字・表記等について理論的かつ系統的に学習することで普段何気なく使っている日本語への理解が深まる。国語教員、日本語教師希望の学生にとっては、将来の職業上、必要になる専門的知識、更なる知識を得る上での基礎となる事項を身につける。

●授業計画

- 第1回 日本語とは、言語の機能、
- 第2回 日本語の位置付け、言語研究の諸分野
- 第3回 音声と音韻
- 第4回 子音の分類
- 第5回 子音の詳説
- 第6回 母音の分類
- 第7回 音節とモーラ
- 第8回 プロソディ(韻律)
- 第9回 アクセント
- 第10回 イントネーション
- 第11回 文字の機能と分類
- 第12回 漢字
- 第13回 万葉仮名、平仮名、カタカナ
- 第14回 ローマ字、仮名遣い、表記の問題
- 第15回 まとめ

●準備学習の内容

次回の授業内容について、教科書を読み、要点をまとめておく。(1時間程度)

授業終了後は、不明な点・疑問点について参考文献で調べ、ノートを完成させること。

●評価方法・基準

定期試験(80%)、提出物(出席カードへのコメント記入)(20%)。提出物に対する講評などは、授業初めに行う。

●履修上の留意点

「概論」であるが、かなり専門的事項を扱い、かつ広範囲にわたるので、最も難しい、単位のとりにくい科目と言われる。安易な履修をせず、将来日本語学系のゼミを希望する者の履修が望ましい。

教科書は、主として準備学習・事後の学習の際に、各自で使用するためのものと位置付ける。したがって、教科書を買わせておいて使わないという不満を抱いたり、十分に予習をしておかないと、授業中いま何について説明しているのか、教科書のどこをやっているのか、分からないことになりかねない。

●教科書

沖森卓也編『日本語ライブラリー 日本語概説』朝倉書店

●参考書

必要に応じて講義中に言及する。

科目名	日本語学概論Ⅱ		
担当者	徳永 良次		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部1年 日・英・日語		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

日本語研究入門(続)

日本語学概論Ⅰに引き続き、日本語の語彙・文法・方言などについて学ぶ。特に、普段「無意識に」使用している日本語の構造や特徴について、なるべく身近な話題を盛り込んで進めていく。

1年生以上を対象とした基礎科目です。

(学習目標)

日本語の語彙・文法・方言等について理論的かつ系統的に学習することで、普段何気なく使っている日本語への理解を深める。

●授業計画

- 第1回 語と語彙
- 第2回 語彙量
- 第3回 語種 和語
- 第4回 語種 漢語
- 第5回 語種 漢語の造語力
- 第6回 語種 外来語
- 第7回 文法とは 文法学説
- 第8回 学校文法をめぐる問題点
- 第9回 現代の文法研究の考え方
- 第10回 言語生活
- 第11回 方言 日本語区画論
- 第12回 言語圏論
- 第13回 新方言
- 第14回 日本語の戸籍
- 第15回 日本語系統論

●準備学習の内容

日本語学概論Ⅰを履修していること。日本語に関心を持ち、いろいろなことに目を向ける「知的好奇心」を持っていることが必要。「概論」という科目名ではあるが、かなり専門的な内容である。

●評価方法・基準

試験(80点)、平常点(20点)。平常点とは、ただ出席しているだけではなく、適宜課題を出して、調査・研究して発表してもらうことも考えており、それへの質疑状況などを主要な評価の対象とする。

●履修上の留意点

「日本語学概論Ⅰ」を履修していることが望ましい。

●教科書

藤田保幸『緑の日本語学教本』和泉書院

●参考書

必要に応じて講義時に紹介する

科目名	日本語学概論Ⅱ		
担当者	菅 泰雄		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	2部1年 日・英・日語		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

日本語研究入門(統)
日本語学概論Ⅰに引き続き、日本語の語彙・意味、文法、待遇表現、日本語の諸相について学ぶ。

教職(国語)、日本語教員養成課程の必修科目である。

教職1年次以上を対象とした基礎科目である。

(学習目標)

日本語の語彙・文法・方言等について理論的かつ系統的に学習することで、日本語への理解を深める。

国語教員、日本語教師希望の学生は、将来職業上、必要な専門知識、更なる知識を得る上での基礎事項を身につける。

●授業計画

- 第1回 語と語彙
- 第2回 意味の構造
- 第3回 意味の変化
- 第4回 比喩表現
- 第5回 語構成
- 第6回 語種 和語・漢語
- 第7回 語種 外来語 受容と変容
- 第8回 文法と文法論
- 第9回 文法(形態論)
- 第10回 文法(構文論)
- 第11回 述語に現れる文法カテゴリー
- 第12回 待遇表現
- 第13回 属性による変種
- 第14回 地域による変種
- 第15回 まとめ

●準備学習の内容

日本語学概論Ⅰを履修していること。次回の授業内容について、教科書を読み、要点をまとめておく。(1時間程度) 授業終了後は、不明な点・疑問点について参考文献で調べ、ノートを作成させること。(1時間程度)

●評価方法・基準

試験(80%)、提出物(出席カードへのコメント記入等)(20%)。提出物に対する講評などは、授業時冒頭に行う。

●履修上の留意点

「日本語学概論Ⅰ」を履修していることが望ましい。

「概論」であるが日本語系科目としてはかなり専門的な事項を広範囲に扱うため、最も難しいと言われる。安易な履修をせず、将来日本語学系のゼミを希望する者の履修が望ましい。

教科書は、主として準備学習・事後の学習の際に、各自で使用するためのものと位置付ける。したがって、教科書を買わせておいて使わないという不満を抱いたり、十分に予習をしておかないと、授業中いま何について説明しているのか、教科書のどこをやっているのか、分からないことになりかねない。

●教科書

沖森卓也他編『日本語ライブラリー 日本語概説』朝倉書店

●参考書

必要に応じて講義時に紹介する。

科目名	日本語学特論Ⅰ		
担当者	菅 泰雄		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部3年 日・英・日語 2部3年 日・英・日語		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

日本語文法基礎
日本語文法(形態論・構文論)に関わる基礎的な概念、方法論、及び最近の研究動向について学ぶ。

この科目は、3年生以上を対象とした言語文化の展開科目である。

(学習目標)

日本語文法についての基本事項を習得するとともに、自ら運用する言語について客観的に観察し評価する能力を身につける。

国語教師、日本語教師にとって、身につけておくべき事項について理解を深める。

●授業計画

- 第1回 文法と文法理論
- 第2回 形態論と構文論
- 第3回 言語の単位(語と句の連続性)
- 第4回 品詞分類に見られる連続性
- 第5回 名詞の特性
- 第6回 動詞の特性
- 第7回 形容詞の特性
- 第8回 副詞の特性
- 第9回 助詞の用法
- 第10回 述語に現れる文法カテゴリー
- 第11回 ボイス
- 第12回 アスペクト
- 第13回 テンス
- 第14回 モダリティ
- 第15回 まとめ

●準備学習の内容

配布プリントをもとに、基本参考書を用いて毎回の授業ごとの内容について予習を行うこと(60分程度)。復習は、授業時の不明点・疑問点を参考書などで解決すると同時に、授業時に触れなかった関連事項・発展事項についても参考書を用いて調べ、ノートを完成させる(90分)。日頃から、身の周りの日本語(表現)に目と耳を向けておいてほしい。

●評価方法・基準

試験(80%)と提出物[出席カードへのコメント記入](20%)による。提出物に対する講評などは、毎回の授業時冒頭でコメントする。

●履修上の留意点

「日本語学概論Ⅰ・Ⅱ」を履修済みという前提で授業を進める。未履修の場合は、独習によって、その知識を身につけておくこと。国語教師、日本語教師にとっては、職業上、必要な専門的知識となる。

質問に対するコメントは、次回の授業時冒頭に行うので、遅刻は厳禁である。

日本語系ゼミを希望する者の履修を望む。

●教科書

特になし。プリント配布。

●参考書

森山卓郎『ここからはじまる日本語文法』ひつじ書房、2000年
山田敏弘『国語教師が知っておきたい日本語文法』くろしお出版、2004年

松岡 弘監修(2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

白川博之(2001)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』同上

その他、必要に応じて授業時に言及する。

科目名	日本語学特論Ⅱ		
担当者	徳永 良次		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部3年 日・英・日語 2部3年 日・英・日語		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

テーマ：古代日本語発掘

現代語のおかれている現状を正しく理解するためには、古代日本語がどのように変化し発展してきたのか、そして現在も変化し続けているのか、ということについての知識を深めることが重要である。

講義では、日本語の変化について時代順に紹介していく予定である。その際、必要に応じて資料を読んでいく。

3年生以上を対象とした言語文化の展開科目です。

(学習目標)

日本語の各分野について通時的に学びながら、現代日本語の成立について理解を深める。

言語変化について体系的に理解する。

重要な資料についてある程度読めるようにする。

●授業計画

- 第1回 日本語の時代区分
- 第2回 奈良時代 文字
- 第3回 奈良時代 音韻 その他
- 第4回 平安時代 資料
- 第5回 平安時代 文字・かなの発展
- 第6回 平安時代 かな文字資料を読む
- 第7回 平安時代 音韻 音節数の減少について
- 第8回 平安時代 音韻 へ行転呼音 音便
- 第9回 平安時代 文法
- 第10回 鎌倉時代 仮名づかい
- 第11回 鎌倉時代 文法 音韻
- 第12回 室町時代 資料 音韻
- 第13回 中世の資料を読む
- 第14回 江戸時代 文字・音韻
- 第15回 江戸時代 文法・語彙

●準備学習の内容

基本的な古典文学や歴史上の知識は知っておくことが望ましい。

●評価方法・基準

授業への参加（ミニテストなどを含む）20% 試験80%
ミニテストの結果については講義時に言及する。

●履修上の留意点

ノートはきちんと取ること。教科書を使わないので不明な点はすぐに解決しておくこと。

●教科書

使用しない。

●参考書

適宜プリントを配布する。

科目名	日本語教育演習 (日本語教育演習Ⅰ)		
担当者	國岡 洋亮		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部3年 日・英・日語 2部3年 日・英・日語		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

日本語教師に必要とされる知識を深め、日本語教育の方法として応用できるようにする。

この科目は3年生以上を対象とした日本文学学科の展開科目である。英米文化学科の学生は、4科目8単位まで卒業単位として認定される。

(学習目標)

日本語教育能力検定試験に対応した知識を習得し、日本語教育の実践につながる応用力を身につける。日本語教育及び関連する領域についての動向を知る。

●授業計画

- 第1回 授業の目的・進め方、履修上の注意
- 第2回 日本語教育とは
- 第3回 日本語の音声・音韻体系(1)基礎編
- 第4回 日本語の音声・音韻体系(2)応用編・聴解
- 第5回 日本語の文法体系(1)基礎編
- 第6回 日本語の文法体系(2)応用編
- 第7回 日本語の文法体系(3)実践編
- 第8回 言語運用能力
- 第9回 言語使用と社会
- 第10回 言語習得・発達(1)習得過程
- 第11回 言語習得・発達(2)学習者要因
- 第12回 異文化理解と心理
- 第13回 言語教育法(1)基礎編
- 第14回 言語教育法(2)応用編
- 第15回 まとめ

●準備学習の内容

日ごろから言語や日本語教育に対する関心を持ち、授業の中で考察できるようにする。

●評価方法・基準

平常点（授業活動参加など）(50%)、試験（50%）で評価する。

●履修上の留意点

講義及び学生による発表によって授業を行う。広い分野にわたるため、すでに日本語学・日本語教育学に関する基礎的な知識を有しているものとして授業を進める。

●教科書

公益財団法人・日本国際教育支援協会『平成30年度 日本語教育能力検定試験 試験問題』（凡人社、2019年）

●参考書

授業時に適宜紹介する。

科目名	日本語教育学特論 (異文化間教育学)		
担当者	藤原 安佐		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部3年 日・英・日語 2部3年 日・英・日語 (1部2年 日・英・日語 2部2年 日・英・日語)		

履修状況によって内容を変更することがあります。

●教科書

特になし。

●参考書

川上郁雄 (2017) 『公共日本語教育学-社会を作る日本語教育』
くろしお出版
庵功雄 (2016) 『やさしい日本語-多文化共生社会へ』 岩波新書

その他の参考書は授業中に指示する

●授業のねらい

(授業のテーマ)

外国人の定住化が進み日本語学習者はますます多様化しています。日本語教師はその多様化したニーズに応えられるよう学習者を取り巻く環境を理解し、どのような学習支援が必要とされているのか考えることが求められます。

また地域の国際化が進み、多文化共生社会がますます身近な問題になってきます。多文化共生社会において個人としてどのようなことができるのか、身近な事例を通して検討していきます。

3年生以上を対象とした日本文化学科の展開科目です。英米文化学科の学生は、4科目8単位まで卒業要件として認定されます。(学習目標)

1. 多様化する日本語学習者の背景や問題を理解し、どのような学習支援ができるのか考える力を身につける。
2. 異なる文化を持つ人々と円滑にコミュニケーションを取る能力を身につける。
3. 国際化が進む地域の問題を身近な問題としてとらえることができるようになる。

●授業計画

- 第1回 オリエンテーション-多文化化する日本社会の現状と課題
- 第2回 多様化する日本語学習者を取り巻く問題
- 第3回 多様化する日本語学習者を考える1-成人の日本語学習者
- 第4回 多様化する日本語学習者を考える2-技術研修生・就業者
- 第5回 多様化する日本語学習者を考える3-年少者
- 第6回 多文化共生について考える1-地域の日本語教室
- 第7回 多文化共生について考える2-多言語情報
- 第8回 多文化共生について考える3-やさしい日本語(理論編)
- 第9回 多文化共生について考える4-やさしい日本語(実践編)
- 第10回 多文化共生について考える5-やさしい日本語(発表)
- 第11回 異文化コミュニケーションを考える1-言語コミュニケーションと非言語コミュニケーション
- 第12回 異文化コミュニケーションを考える2-ステレオタイプとカルチャーショック
- 第13回 異文化コミュニケーションを考える3-身の回りにある異文化コミュニケーション
- 第14回 異文化コミュニケーションを考える4-海外で日本語を教えるには
- 第15回 まとめ-事例発表

●準備学習の内容

1. 毎回の授業に関する資料を読むこと。
2. 日頃から新聞やニュースなどを通じ、多文化共生に関する情報に関心を持つこと。
3. 学内外で積極的に異文化接触(留学生との交流、アルバイト先などでの外国人観光客との接触、ボランティア、交流行事の参加など)を心掛けること。

●評価方法・基準

授業への参加度40%(感想ノート、グループワーク、発表)、および課題(全3回)60%で評価する。

●履修上の留意点

授業では毎回グループワークがあるので積極的に参加し、各自の意見や経験を共有することで理解を深めてください。クラス活動に貢献する積極的な発言を期待します。

科目名	日本語教育特別演習 (日本語教育演習Ⅱ)		
担当者	中川かず子		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部3年 日・英・日語 2部3年 日・英・日語		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

海外、または国内の日本語教育現場で体験的な学習とともに教育実践能力を身に付ける。

この科目は、3年生以上を対象とした課外学修科目である。

(学習目標)

1. 対象となる教育現場と学習者に合う教材と教授法を考える。
2. 具体的な授業案を作成し、実習授業で実践する。
3. 課題を認識し、問題解決の方法を考える。

●授業計画

授業の開講形態として、後期、集中講義とする。以下に授業計画を示す。

- 1) 実習のための準備として、教案・教材、教授法に関する指導(実習前に約10時間の集中授業により指導、8月中に実施)
- 2) 実習授業—
 - ①市内日本語教室【ボランティア日本語教室「たんぼぼ」(札幌エルプラザ内)で9月～12月週1回3時間、計30時間、うち、見学、TA(アシスタント)が20時間、授業実習が10時間、授業後の反省会には毎回参加】
 - ②海外日本語教育機関【韓国協定校「大田大学」にて9月初旬～中旬2週間、30時間、うち、見学、TA(アシスタント)が20時間、授業実習が10時間(予定)、実習授業のほか、学習者との交流も行なう。】
- 3) フィードバック【実習後の反省会、11～12月に2時間】

【日程については多少の変更の可能性有】

●準備学習の内容

事前に配布された資料を読んだり、課題に取り組み、積極的に質問を出しておく。特に海外(韓国大田大学)の実習を行う場合は、韓国における日本語教育の歴史、その特徴についても理解を深めておく。

●評価方法・基準

授業参加態度(30%)、実習成績(30%)、教案・教材一覧(ポートフォリオ)(20%)、レポート(20%)

●履修上の留意点

本授業は集中形態をとり、事前、事後の授業時間が限られることから、欠席は認められません。やむを得ない事情がある場合は事前に相談すること。

●教科書

特に使用しない。プリントを用意する。

●参考書

授業中、適宜紹介する。学習者の言語習得、外国語教授法、対照言語関連の文献、資料が中心

科目名	日本語教授法Ⅰ		
担当者	中川かず子		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部2年 日・英・日語 2部2年 日・英・日語		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

国内外で日本語学習者が増える中、外国人に対する日本語教育(外国語・第2言語教育)について様々な視点から知識と情報を獲得することが授業の目的である。授業では、国内、海外で学ぶ学習者の概要、彼らに対する日本語教育内容の段階別、技能別展開、第2言語習得における様々な特徴と課題、さらには日本語教育の歴史の変遷についても理解を深めてもらう。

この科目は、2年生以上を対象とした「言語・文化」の基礎科目である。

(学習目標)

学習者を取り巻く言語・社会・文化的環境、習得要因を理解し、その上で、日本語教育の内容と方法の全体像を学ぶ。

●授業計画

- 第1回 日本語教育概論—日本語の捉え方、国内外の学習者と教授法ほか
- 第2回 異文化間教育としての日本語教育—異文化適応、文化の捉え方
- 第3回 初級学習者への教育(1)—会話と文法(構造シラバス～文法と会話)
- 第4回 初級学習者への教育(2)—会話と文法(機能シラバスとコミュニケーション)
- 第5回 初級学習者への教育(3)—音声の指導
- 第6回 中上級学習者への教育(1)—読解と文法、語彙・表現の理解
- 第7回 中上級学習者への指導(2)—談話の特徴の理解とその指導
- 第8回 中上級学習者への指導(3)—文字表記(仮名遣い、漢字の字音・字訓、ローマ字)
- 第9回 日本語教育と日本語学習—第二言語習得、学習者要因、学習ストラテジー
- 第10回 外国語教授法と日本語教育(1)—Natural Method～Direct Method(自然主義～直接言語教授法)
- 第11回 外国語教授法と日本語教育(2)—Audio-Lingual法(構造主義)～コミュニケーション法(機能、自律性)
- 第12回 国内外における日本語教育の歴史(1)—19世紀後半～戦前
- 第13回 国内外における日本語教育の歴史(2)—戦後～現在
- 第14回 まとめ
- 第15回 到達度チェック

●準備学習の内容

配布される資料や講義内容を復習し、疑問点や質問事項を整理した上で、次の授業に臨む。

●評価方法・基準

授業参加態度(30%)、試験結果(70%)を総合して評価する。

●履修上の留意点

概論ではあるが、やや実践的な内容に即して授業を進めるので、日本語教員養成課程履修者のほか、日本語教育に関心のある学生の履修を望む。

●教科書

なし。プリントを使用するほか、OHP、PPTなどで資料提示する。

●参考書

授業中に適宜紹介する。

科目名	日本語教授法Ⅱ		
担当者	中川かず子		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部2年	日・英・日語	
	2部2年	日・英・日語	

●授業のねらい

(授業のテーマ)

日本語教授法Ⅰでの「概論」を踏まえ、この授業ではより実践的な内容を展開する。まず、実際に国内外の学習者を想定し、学習目標と教授法に関わる諸要因を勘案し、コースデザインを作成することから始める。その上で、具体的な教育内容を展開していく。特に、コミュニケーション能力を育成するための段階別、技能別の教材を理解してもらう。

この科目は、2年生以上を対象とした「言語・文化」の基礎科目である。

(学習目標)

具体的な日本語教育の内容と方法を学習する。日本語教育の全体像を知る。そのために、この授業ではほぼ毎回「課題」を設定し、問題と取り組みながら理解を深める方法をとる。

●授業計画

- 第1回 学習者の多様性と日本語教育
コースデザイン、シラバスデザインについて
- 第2回 初級学習者への教授法(1)ーコミュニケーションのための音声教育
(アクセント、リズム、イントネーションの習得)
- 第3回 初級学習者への教授法(2)ー会話・文法教育の実践(表現文型、場面を中心とした直接法)
- 第4回 初級学習者への教授法(3)ー口頭コミュニケーション能力育成のための教育
(インターアクション、タスク型、プロジェクト型教授法について)
- 第5回 初・中級学習者への教授法ー非漢字圏学習者への漢字指導法
(クイズ、タスクなどの創造的な漢字指導ー Basic Kanji, Intermediate Kanji を中心に)
- 第6回 中上級学習者への教授法(1)ー読解指導の実践、読解ストラテジー(新聞記事、小説等の生教材を用いて)
- 第7回 中上級学習者への教授法(2)ー読解の実践法～口頭表現能力の育成法
- 第8回 中上級学習者への教授法(3)ー中上級学習者のための文法内容とその指導
- 第9回 学習者の誤用と語用論的能力の習得(1)ー文法、語彙・表現を中心に
- 第10回 学習者の誤用と語用論的能力の習得(2)ー音声、聴解を中心に
- 第11回 多様な学習者に対する教材、教授法について
- 第12回 日本語教育における評価法ーテストの種類、評価の基準について
- 第13回 国内における日本語教育ー留学生政策、外国人への施策
- 第14回 海外における日本語教育ー現状と課題
- 第15回 まとめ

●準備学習の内容

配布資料や講義内容を復習し、疑問点や質問を整理した上で、次の授業に臨む。

第1回～第10回までの授業では毎回2～3の「課題」と取り組み、授業中、または翌週に確認を行なう。

●評価方法・基準

平常点(30%)、試験(70%)を総合的に評価する。

●履修上の留意点

日本語教育に関心のある学生の履修を望む。

●教科書

なし。プリントを使用するほか、OHP, PPTなどで資料提示する。

●参考書

授業中に適宜紹介する。

科目名	日本語教授法Ⅲ		
担当者	森 良太		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部3年 日・英・日語		

●授業のねらい
(授業のテーマ)

日本語を母語としない人への日本語教育の方法を、理論をふまえて実践的に学ぶ。

この科目は、3年生以上を対象とした言語文化の展開科目です。
(学習目標)

- 1) 日本語の仕組みを理論的に理解し、自らの日本語や周りにある日本語を客観的に分析する。
- 2) 様々な背景を持つ日本語学習者の現状に合わせた初級の教授法を学ぶ。
- 3) 実習により初級レベルの日本語教育における実践力を養成する。

●授業計画

- 第1回 ガイダンス、履修上の留意点
 第2回 初級日本語とは(1)授業で何を行うか
 第3回 初級日本語とは(2)何を使って教えるか
 第4回 実際の教え方(1)授業の流れ① アイスブレイキングと導入
 第5回 実際の教え方(2)授業の流れ② 基本練習と応用練習
 第6回 教案の作り方
 第7回 教壇での動き方
 第8回 初級模擬実習(1)形容詞
 第9回 初級模擬実習(2)動詞の活用(て形など)
 第10回 初級模擬実習(3)受身
 第11回 初級模擬実習(4)まとめ
 第12回 実習フィードバック(1)授業の組み立て方
 第13回 実習フィードバック(2)教え方、説明の仕方
 第14回 評価
 第15回 まとめ

●準備学習の内容

実習では念入りに事前準備を行う必要があるため、グループ内で連絡を合うなどチームワークが求められる。また、普段から身の回りの日本語を意識する習慣をつけることが望ましい。

●評価方法・基準

平常点(授業態度、課題等提出物など)(70%)、模擬授業への取り組み(30%)

●履修上の留意点

原則的に日本語教授法Ⅰ、Ⅱの履修者を対象とする。

●教科書

教師がプリントを配布する。

●参考書

授業内にて適宜紹介していく。

科目名	日本語教授法Ⅲ		
担当者	歌代 崇史		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	2部3年 日・英・日語		

●授業のねらい
(授業のテーマ)

日本語教育に関連した理論を踏まえ、実践における教授方法を学習する。1学期では主に初級レベルの授業で必要となる知識とスキルを学ぶ。初級レベルにおける文法指導を基盤にしつつ、読む、書く、話す、聞くの4技能の育成を総合的に行う授業の構成方法について考える。授業の組み立て方、シラバスの作成方法、指導案の書き方などについて実習を取り入れながら学ぶ。3年生以上を対象とした日本文化学科の展開科目である。英米文化学科の学生は、4科目8単位まで卒業要件として認定される。

(学習目標)

1. 日本語学習者と日本語教師の役割を理解し、学習者の能力に応じたシラバス作成、指導のあり方について考える。
2. 初級文法の指導方法、指示の仕方、教室活動の実施方法を学び、短い時間の授業が構成できるようになる。
3. 教材分析及び指導案が作成できるようになる。
4. 実習を行う。

●授業計画

- 第1回 オリエンテーション、日本語教師の役割(1)
 第2回 日本語教師の役割(2)、コースデザイン(1)
 第3回 コースデザイン(2)、初級文法知識の整理(やり方説明)、グループ決定
 第4回 初級文法知識の整理(発表) 1
 第5回 初級文法知識の整理(発表) 2
 第6回 シラバスの概要、日本語教科書のもくじから考える、文型から課の目標を考える
 第7回 副教材を考える。現実に近いコミュニケーションの指導方法。文法の教え方の概要。
 第8回 指導案の書き方→指導案を書く
 第9回 日本語教科書の構成を知る。実習担当箇所の決定、担当箇所の教科書分析→指導案の作成
 第10回 指導案の修正、オリジナルの活動を考える。
 第11回 グループごとに練習。評価ポイントの確認。
 第12回 実習1(グループごとに模擬授業を実施)
 第13回 実習2(グループごとに模擬授業を実施)
 第14回 実習3(グループごとに模擬授業を実施)
 第15回 模擬授業の分析及びリフレクション、新しい指導案の作成

●準備学習の内容

毎週配布される資料を読み、授業に備える。

●評価方法・基準

平常点(授業への参加態度)10%
 課題提出20%
 実習35%(実習に参加しなければ評価対象にしない)
 レポート35%(提出されなければ評価対象にしない)
 出席率は70%以上必要
 課題に関しては授業の中でフィードバックを行う

●履修上の留意点

日本語教授法Ⅰ及びⅡを履修していることが望ましい。課題提出、授業中の議論、グループ作業、実習への積極的な参加を求める。

●教科書

特に指定しない。教師作成のプリント、資料等。

●参考書

特になし

科目名	日本語教授法Ⅳ		
担当者	森 良太		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部3年 日・英・日語		

●授業のねらい
(授業のテーマ)

日本語を母語としない人への日本語教育の方法を、理論をふまえて実践的に学ぶ。

この科目は、3年生以上を対象とした言語文化の展開科目です。
(学習目標)

- 1) 日本語教授法Ⅲで学んだことをふまえて、日本語の仕組みの理解を更に深く、自らの日本語や周りにある日本語を客観的に分析する。
- 2) 様々な背景を持つ日本語学習者の現状に合わせた中上級の教授法を学ぶ。
- 3) 実習により中上級レベルの日本語教育における実践力を養成する。

●授業計画

- 第1回 ガイダンス、履修上の留意点、中上級レベルとは
 第2回 中上級の授業とは
 第3回 中上級の授業計画
 第4回 ニーズに合わせた日本語の授業
 第5回 実習に向けて(1)学習目標と学習項目
 第6回 実習に向けて(2)教案作成
 第7回 実習に向けて(3)教材の選定
 第8回 実習に向けて(4)練習問題作成
 第9回 中上級模擬授業(1)文法
 第10回 中上級模擬授業(2)会話
 第11回 中上級模擬実習(3)総合
 第12回 中上級模擬授業(4)まとめ
 第13回 読解問題の作成
 第14回 フィードバック
 第15回 まとめ

●準備学習の内容

実習では十分な事前準備が必要になるため、グループ内で連絡を取り合うなどチームワークが求められる。また、普段から身の回りの日本語を意識する習慣をつけることが望ましい。

●評価方法・基準

平常点(授業態度、課題等提出物など)(70%)、模擬授業への取り組み(30%)

●履修上の留意点

原則的に日本語教授法Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの履修者を対象とする。

●教科書

教師がプリントを配布する。

●参考書

授業内にて適宜紹介していく。

科目名	日本語教授法Ⅳ		
担当者	歌代 崇史		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	2部3年 日・英・日語		

●授業のねらい
(授業のテーマ)

2学期では主に中・上級レベルの授業で必要となる知識とスキルを学ぶ。日本語教育における中級・上級レベルを理解し、技能別に様々な教授方法を分析する。分析を踏まえて、教材作成、教材を使った実践を行う。読む、話すの2技能の指導に関して、実習形式で授業を進める。指導案の作成、実習準備、実習の実施、実習の振り返りなど積極的な参加を必要とする課題が多い。3年生以上を対象とした日本文化学科の展開科目である。英米文化学科の学生は、4科目8単位まで卒業要件として認定される。

(学習目標)

1. 日本語教育における中級・上級の理解。
2. 技能別に「読む」、「話す」の指導方法を理解する。
3. 教材分析を踏まえて、指導実践を行う。
4. オリジナル教材を作成し、実習を行う。

●授業計画

- 第1回 オリエンテーション、中・上級の理解
 第2回 グループの決定、担当日の決定、日本語能力試験と日本留学試験
 第3回 試験問題による中・上級の理解
 第4回 OPIの理解と実践
 第5回 OPIを利用した授業実践
 第6回 「話す」教材の分析と理解
 第7回 「話す」の教材分析発表
 第8回 「話す」模擬授業
 第9回 フリーソフトを使った新しい学習タスクの考案
 第10回 フリーソフトを使った新しい学習タスクの発表
 第11回 オリジナル教材による模擬授業の説明、発表順番決定、授業準備
 第12回 オリジナル教材による模擬授業(1)
 第13回 オリジナル教材による模擬授業(2)
 第14回 オリジナル教材による模擬授業(3)
 第15回 模擬授業の分析及びリフレクション、新しいオリジナル教材とその指導案の作成

●準備学習の内容

毎週配布される資料を読み、授業に備える。

●評価方法・基準

平常点(授業中への参加態度)10%
 課題提出40%
 実習25%(実習に参加しなければ評価対象にしない)
 レポート25%(提出がなければ評価対象にしない)
 出席率は70%以上必要
 課題に関しては授業の中でフィードバックを行う

●履修上の留意点

日本語教授法Ⅲを履修していることが望ましい。実習、課題発表には積極的に参加することを求める。

●教科書

特になし

●参考書

特になし

科目名	日本語発声実習		
担当者	塚原 孝子		
単位数	2	開講期	第1学期 第2学期
開講年次	1部1年 日・英・日語 2部1年 日・英・日語		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

話しをする、あるいは読む時、その人の知性と感性が求められる。よりよいコミュニケーションのために表現力をアップして、美しく魅力的な日本語を身につける(豊かな声量、響きのよい声、柔らかくて落ち着いた声、品位を感じられる声作りで表現力をつける)

この科目は1年生以上を対象とした言語文化の基礎科目です。

(学習目標)

自分の話し方をありのままに捕えて、客観的に見つめ直し言葉の世界を豊かにし、感性を磨く。相手の心に届く「声」をめざす。

●授業計画

- 第1回 なぜ何のために、日本語を学ぶのか(オリエンテーション)
- 第2回 話し言葉の心得(よりよいコミュニケーションのために)
- 第3回 呼吸法と基本トレーニング(1)
- 第4回 呼吸法と基本トレーニング(2)～実践
- 第5回 発声法
- 第6回 発音法
- 第7回 正しく美しい音声表現(標準語と方言など)
- 第8回 日本語の音調(アクセント、イントネーション、プロミネンス、アーティキュレーションなど)
- 第9回 朗読法
- 第10回 表現の技術(基礎及び実践)－1
- 第11回 表現の技術(実践)－1
- 第12回 表現の技術(実践)スタジオ使用－1
- 第13回 表現の技術(実践)スタジオ使用－1
- 第14回 話し言葉の実践(待遇表現、敬語)
- 第15回 まとめと到達度チェック

●準備学習の内容

授業中での指示に従って(配布物なども参考に)課題に取り組み、復習をして次の授業に備える。

●評価方法・基準

試験(40%)授業への参加状況(40%)「基礎知識の習得」に関する、小テスト、レポート(20%)で評価する。レポートの結果については授業内でコメントする。

●履修上の留意点

全回出席を基本とするため、第1回目の講義を受けた者のみを履修対象とする(但し授業の性格上、人数が30名を超える場合は履修制限を行う。1部は第1回の授業時に実施する設問・テストなどで選考し、2部は4月に履修願を提出の上、その内容で判断する)。

欠席届があった場合を除き、欠席が3回となった者の単位は認められない。課題、テーマへの意欲的な取り組み、積極的な授業への参加と受講態度を重視するものとする。

●教科書

特に使用しない。必要に応じてプリントを配布する。

●参考書

参考文献は授業中に紹介する。

科目名	日本史概論 I		
担当者	追塩 千尋		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部1年 日 2年 英・日語 2部1年 日 2年 英・日語 (1部1年 日・英 2部1年 日・英)		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

「日本古代・中世の論点的通史」 高校までの日本史を踏まえ、大学では単なる通史ではなく、何が問題になっているのか、それをどのように考えたらよいのか、という関心のもとに日本古代・中世の諸問題をいくつか取り上げて論ずる。

1年生以上(英米文化学科は2年生以上)を対象とした基礎科目で、選択科目である。

(学習目標)

1. 歴史は歴史研究者により作られるものであることを理解し得ること。
2. 高校までに学んだ日本史からの脱却が出来るかどうか。

●授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 邪馬台国から大和朝廷へ(1)～邪馬台国論争
- 第3回 邪馬台国から大和朝廷へ(2)～大和朝廷
- 第4回 聖徳太子論
- 第5回 律令国家論(1)～しくみ・制度
- 第6回 律令国家論(2)～平城京
- 第7回 王朝国家論～そのしくみ
- 第8回 王朝国家論～政治の展開
- 第9回 中世社会観の変遷
- 第10回 鎌倉幕府論
- 第11回 室町幕府論
- 第12回 戦国大名論
- 第13回 中世の天皇
- 第14回 中世の歴史思想
- 第15回 まとめと到達度チェック

●準備学習の内容

高校で日本史を学んでいない受講者は最低限教科書レベルの理解をしておくこと

●評価方法・基準

試験100点(講義ノート・配布資料の参照可の試験。講義の意図の理解の可否が鍵)。授業の節目に何回か感想・質問などを記入してもらい、フィードバックする場を設ける。

●履修上の留意点

歴史事象の評価は固定的なものではなく、視点を変えると違った歴史像が描けるものである、ということをも早く認識すること。

●教科書

使用しない。必要に応じてプリント配布。

●参考書

- 井上光貞他編『日本歴史大系』1.2,山川出版社,1984年
- 岩波講座『日本歴史』1～9巻,岩波書店,2013年～
- 『日本の時代史』全30巻,吉川弘文館,2002年～2004年
- 『新体系日本史』全20冊,山川出版社,2001年～
- 『展望日本歴史』全24巻,東京堂出版,2000年～
- 高橋秀樹他編『ここまで変わった日本史教科書』吉川弘文館,2016年
- 木村茂光他編『大学でまなぶ日本の歴史』吉川弘文館,2016年

科目名	日本史概論Ⅱ (日本史概論Ⅲ)		
担当者	郡司 淳		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部1年 日 2年 英・日語 2部1年 日 2年 英・日語 (1部2年 日・英・日語 2部2年 日・英・日語)		

●授業のねらい
(授業のテーマ)

本授業は、日本がペリーの来航によって「西欧の衝撃」を受けた19世紀中頃から、1945年のアジア・太平洋戦争の敗戦にいたる時期を対象とし、日本近代史を概観しようとするものである。具体的には、江戸時代における全国市場の成立をふまえ、日本が明治維新、日清・日露戦争を経て「脱亜入欧」を果たしたのち、西欧列強とともに創り上げた第一次世界大戦後の国際社会の枠組みであるベルサイユ=ワシントン体制に挑戦し、独自の秩序形成に向かった満州事変からアジア・太平洋戦争かけての歴史をあとづける。

この科目は、1年生以上（英米文化学科は2年生以上）を対象とした歴史文化の基礎科目である。

(学習目標)

- ・日本近代史についての基礎的知識を身につける。
- ・史資料をもとに歴史を再構成する方法を身につける。

●授業計画

- 第1回 ガイダンス—近代とは
- 第2回 江戸時代
- 第3回 西欧の衝撃
- 第4回 明治維新1—統一国家の形成
- 第5回 明治維新2—戸籍・学制・徴兵制
- 第6回 「御一新」と民衆
- 第7回 立憲国家への道
- 第8回 日清戦争
- 第9回 産業革命1—資本主義の成立
- 第10回 産業革命2—女工労働の実態
- 第11回 日露戦争
- 第12回 大正デモクラシー
- 第13回 戦争の時代
- 第14回 敗戦
- 第15回 まとめ—到達度チェックと解題

●準備学習の内容

- ・テーマ毎に事前に資料プリントを配布するので、辞書・辞典を引きつつ、予め読んでおくこと。
- ・授業で提示された歴史像を相対化し、自らのものとするべく、関連文献を可能な限り読むこと。

●評価方法・基準

授業最終日に実施する論述形式の到達度チェックで評価する。設問に対し、授業で得た知見をふまえ、自分の言葉で解答し得たか否か、さらにそれが論として成り立っているか否かが評価の基準となる。

●履修上の留意点

資料読解に必要な国語辞典・漢和辞典・歴史事典・歴史年表等を持参すること。

●教科書

資料プリントを配布する。

●参考書

適宜紹介する。

科目名	日本文化概論Ⅰ (日本文化史Ⅰ)		
担当者	鈴木 英之		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部1年 日 2年 英・日語 2部1年 日 2年 英・日語 (1部1年 日・日語 2部2年 日・日語)		

●授業のねらい
(授業のテーマ)

日本は、四方を海に囲まれているが、決して閉鎖された空間などではない。中国や朝鮮、ロシア、また南方からも様々な人々が日本を訪れ、互いに影響を与えあいながら、多種多様な文化を形成してきた。本講義では、地理・神話・宗教・哲学・思想・祭り・言語・文学・芸能・建築・食文化・世界遺産などの側面から、多様性に富んだ日本文化の特質について考えていきたい。

この科目は、1年生以上（英米文化学科は2年生以上）を対象とした思想文化の基礎科目です。

(学習目標)

- ・日本文化の多様性を理解する。
- ・日本文化が東アジア文化圏に属していることを認識する。

●授業計画

- 第1回 オリエンテーション。アンケートの実施。
- 第2回 日本とは何か
- 第3回 日本のかたち
- 第4回 日本の神話と王権
- 第5回 日本の宗教（神道）
- 第6回 日本の宗教（仏教）
- 第7回 日本の哲学・思想
- 第8回 日本の祭り
- 第9回 日本の言語
- 第10回 日本の文学
- 第11回 日本の芸能
- 第12回 日本の建築
- 第13回 日本の食文化
- 第14回 日本の世界遺産
- 第15回 まとめ

●準備学習の内容

事前に資料プリントを配布するので、あらかじめ目を通しておくこと。

●評価方法・基準

期末レポート（85点）、および平常点（15点。出席は評価に含めない）で評価する。到達度チェックの結果については掲示板にて公表する。

●履修上の留意点

- ・予備知識などは問わない。古文・漢文資料の読解が主となるが、きちんと授業を聞いていれば問題ない。
- ・授業中の私語は厳禁。授業開始後30分以上経ってからの受講・出席は認めない。
- ・日本の文学、美術を専攻する人にとっても仏教の知識は不可欠である。積極的な授業への参加を期待する。

●教科書

特になし。毎回資料プリントを配布する。

●参考書

授業中に適宜紹介する。

科目名	日本文化概論Ⅱ		
担当者	吉村 悠介		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部1年 日 2年 英・日語 2部1年 日 2年 英・日語 (1部1年 日・日語 2部2年 日・日語)		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

テーマ：日本近現代の文化を、都市生活に焦点をあてて考察する。

現在のわたし達のライフスタイルの原型を築いた「大正文化」、商品と情報の消費が加速度的に進展した「戦後文化」を、それらが成立した背景とともに確認していく。

また、都市とその周縁の関係にも目を向け、帝都発展の陰に生み落とされた近代貧民窟での生活、高度経済成長期以降に顕著となる中央と地方の均質化、現代社会における郊外の位置づけについても検討する。

この科目は、1年生以上を対象とした思想文化の基礎科目である。

(学習目標)

- ・現代日本の生活文化がどのような基盤のうえに形成されたものであったかを理解する。
- ・日本の伝統的な生活文化についての基礎的な知識を身につける。

●授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 文明開化Ⅰ—防火と欧化
- 第3回 文明開化Ⅱ—帝都の暗黒、貧民窟
- 第4回 都市中間層
- 第5回 大正文化Ⅰ—食と衛生①
- 第6回 同上—食と衛生②
- 第7回 大正文化Ⅱ—衣と美容①
- 第8回 同上—衣と美容②
- 第9回 大正文化Ⅲ—住と家族
- 第10回 一億総中流
- 第11回 戦後文化Ⅰ—団地の暮らし
- 第12回 戦後文化Ⅱ—間取り・家電・インテリア
- 第13回 戦後文化Ⅲ—現代社会における郊外
- 第14回 映像でみる戦後文化
- 第15回 まとめ

●準備学習の内容

- ・事前に資料プリントを配布するので、あらかじめ目を通して置くこと。

●評価方法・基準

- ・期末レポート(60%)、筆記試験(20%)、各回のリアクションペーパー(20%)で総合的に評価する。
- ・レポートは4,000字程度を予定。講義内容を踏まえつつ自身の考えが述べられているかを評価の基準とする。

●履修上の留意点

- ・講義内容に関連する書籍・論文等を紹介するので、レポート作成に備えて可能な限りそれらを読むこと。
- ・具体的な履修上のルールを確認するので、初回のガイダンスから出席すること。

●教科書

- ・資料プリントを配布する。

●参考書

- ・適宜紹介する。

科目名	日本文学史Ⅰ		
担当者	関本 真乃		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部1年 日 2年 英・日語 2部1年 日 2年 英・日語 (1部1年 日・日語 2部1年 日・日語)		

●授業のねらい

(授業のテーマ)

上代から近世までの主要な作品を紹介しながら、日本文学の歴史について概観する。

この科目は1年生以上(英米文化学科は2年生以上)を対象とした言語文化の基礎科目である。

(学習目標)

- ・各作品の原文に触れつつ、それぞれのジャンル・時代の特徴を読み取る。
- ・作品相互の関係を理解する。

●授業計画

- 第1回 総論・上代①(歴史書・古事記)
- 第2回 上代②(歌集・万葉集)
- 第3回 中古①(歌集・古今和歌集)
- 第4回 中古②(作り物語・竹取物語)
- 第5回 中古③(仮名日記・土佐日記)
- 第6回 中古④(作り物語・源氏物語)
- 第7回 中古⑤(歴史物語・大鏡)
- 第8回 中世①(歌集・新古今和歌集)
- 第9回 中世②(説話・宇治拾遺物語)
- 第10回 中世③(軍記物語・平家物語)
- 第11回 中世④(随筆・徒然草)
- 第12回 中世⑤(謡曲・道成寺)
- 第13回 近世①(俳諧紀行・奥の細道)
- 第14回 近世②(浮世草子・好色一代男)
- 第15回 まとめ

●準備学習の内容

授業内容に関する調査・考察などを課す。課題内容についてはその都度指示する。

●評価方法・基準

学期末の筆記試験(70%)と平常点(30%)によって評価する。平常点は、課題の成果及び授業中の発表などに基づく。筆記試験は自筆ノートのみ持ち込み可とする。

●履修上の留意点

シラバスに挙げた作品以外にも適宜取り上げる。興味を持って積極的に受講してほしい。

●教科書

特になし(必要に応じてプリントを配布する)。

●参考書

小学館・新編日本古典文学全集。

科目名	日本文学史Ⅱ		
担当者	田中 綾		
単位数	2	開講期	第2学期
開講年次	1部1年 日 2年 英・日語 2部1年 日 2年 英・日語 (1部1年 日・日語 2部1年 日・日語)		

●授業のねらい
(授業のテーマ)

日本の近代(明治以降)及び、現代の文学史概論である。
まず、私たちの"いま"と直結する、GHQによる被占領期の検閲と文学を俯瞰し、その後明治期に戻り、日清・日露戦争、昭和期の長い戦争における内務省検閲と文学作品の関係を読み深める。
この科目は、1年生以上(英米文化学科は2年生以上)を対象とした文学の基礎科目である。

(学習目標)

- ①文学作品が、言論統制のもとで活字化されていたことを理解する。
- ②文学作品を通して、「表現の自由」をみずからの問題として考え深める。
- ③近現代文学史と、"いま"の私たちの表現空間との接点を考察する。

●授業計画

- 第1回 ガイダンス—表現の自由とは
- 第2回 GHQ 検閲①その概要
- 第3回 GHQ 検閲②太宰治
- 第4回 GHQ 検閲③坂口安吾
- 第5回 近代文学と言論統制
- 第6回 〈肉食〉文学の登場
- 第7回 〈顔〉の描写の登場
- 第8回 女性作家と日清戦争
- 第9回 森鷗外と日露戦争
- 第10回 冤罪と作家たち
- 第11回 大正期モダニズム詩歌
- 第12回 禁じられた文学と推奨された文学
- 第13回 〈満洲国〉での文学
- 第14回 戦争の傷痕
- 第15回 三浦綾子の文学世界

●準備学習の内容

LMSで配信する教材を毎回参照すること。雑誌発表当時の原文(初出)を実際に目にすることも可能であり、時代性を読み取ることもできる。

文学史はもちろん、日米の近現代史そのものに関心を持つ学生の、積極的な受講をのぞむ。

●評価方法・基準

- ・レポート(60%)と課題調査/感想カードの記述(20%)、受講態度(20%)で評価する。
- ・課題調査結果は集計次第、適宜フィードバックする。感想カードに書かれた創作(短歌・川柳)は、毎回講評し、フィードバックする。
- ・なお、私語は固く禁ずる。

●履修上の留意点

学期末に、4,000~5,000字程度の長文レポート(複数の先行研究を引用した、論理的なレポート)を課す。

授業内容に関心を持ち、期日厳守でレポートを提出できる学生の受講がのぞましい。

●教科書

なし(毎回資料配布)。

●参考書

紅野謙介『検閲と文学』(河出書房新社、2009年)
山本武利『GHQの検閲・課報・宣伝工作』(岩波書店、2013年)
「國文學 7月臨時増刊号 発禁・近代文学誌」(學燈社、2002年)

ほか、授業内やLMS予習教材で、適宜指示する。

科目名	ヨーロッパ文化概論 (欧米文化史Ⅰ)		
担当者	小柳 敦史		
単位数	2	開講期	第1学期
開講年次	1部2年 日・英 2部2年 日・英 (1部2年 英 2部2年 英)		

●授業のねらい
(授業のテーマ)

私たちは日常的に洋服を着て、洋食を食べ、おそらくたいい西洋的な建物で生活しています。この「西洋的」な生活様式はどのように生まれたのでしょうか。そして、こうした生活様式の「西洋性」とはなんなのでしょうか。「西洋」という概念はとらえどころがないので、本講義では「西洋的」なものとの密接な関連がある「ヨーロッパ的」なものについて考えていきます。近代以降のヨーロッパでは、自分たちの生(活)のありかたに対する批判的な再検討と新たな生(活)の提案が繰り返さされてきました。そこで、近代ヨーロッパ的な生(活)の成立と変化の過程をたどり、「ヨーロッパ的」であるとはどのようなことなのか考察します。それはまた、ヨーロッパのみならず、生のいとみなみとしての「文化」とは何かを問うことにもつながるでしょう。

2年生以上を対象とした思想文化の基礎科目です。

(学習目標)

1. 「ヨーロッパ的」な生活の成立とその変遷について適切な用語を用いて説明できる。
2. 「ヨーロッパ的」な生活から具体例をとり、文化とは何かについて論じることができる。

●授業計画

- 第1回 イントロダクション(1): ヨーロッパとは何か
- 第2回 イントロダクション(2): 文化とは何か
- 第3回 イントロダクション(3): 中世までのヨーロッパ文化
- 第4回 宗教改革による生活の変化
- 第5回 フランス革命と美食の誕生
- 第6回 イギリス産業革命と服飾の変化
- 第7回 生改革運動の諸相(1): 「衣」の改革
- 第8回 生改革運動の諸相(2): 「食」の改革
- 第9回 生改革運動の諸相(3): 「住」の改革
- 第10回 第一次世界大戦下の生活
- 第11回 生活のナチズム(1): ナチスのキッチン
- 第12回 生活のナチズム(2): 余暇の大衆化
- 第13回 生活のナチズム(3): 収容所の生
- 第14回 ヨーロッパ文化の現代
- 第15回 まとめ: ヨーロッパ文化とは何か

●準備学習の内容

上記の授業計画に書かれる用語・人名、および毎回の授業で示す「次のキーワード」について事典等で調べてくる。さしあたりはWikipediaでも構わないが、準備学習が深くなるほど、講義される内容が興味深いものとなるだろう。

●評価方法・基準

授業中あるいは宿題として課す小課題20%、期末試験80%
小課題の結果については授業中にコメントする。

●履修上の留意点

特になし。

●教科書

使用しない。プリントを配布するのでA4サイズのファイルを用意すること。

●参考書

橋本周子『美食家の誕生 —グリモと〈食〉のフランス革命』(名古屋大学出版会、2014年)。
川北稔『洒落者たちのイギリス史 —騎士の国から紳士の国へ』(平凡社、1986年)。
竹中亨『帰依する世紀末 —ドイツ近代の原理主義者群像』(ミネルヴァ書房、2004年)。
藤原辰史『ナチスのキッチン —「食べること」の環境史』(水声社、2012年)。
他、授業中に適宜紹介する。

履修方法と履修上の注意

【履修方法】

- 1) 日本語教員養成課程の新規履修希望者は、毎年4月上旬に行なわれるガイダンスに必ず出席してください。ガイダンスの日時は、教務全般のものとは別に掲示されます。
- 2) 履修希望者は、Web履修登録の際に、履修登録画面の「課程申請」をクリックし、「日本語教員」にチェックをつけ、申請を行なってください。5月下旬に受講料の納付書を郵送しますので、これを支払うことにより登録完了となります。登録は、年度途中では認められません。また、年度毎の登録は必要ありません。
- 3) 上記登録は、2年次以上でも可能であるが、1年次に開始することが望ましい。

【履修上の注意】

- 1) 別表の通り、人文学部の専門科目と一般教育科目／共通基礎科目の中から、課程の必修科目並びに選択必修科目が指定されています。このほかにも、関連科目を積極的に履修することを勧めます。
- 2) 別表に示される開講科目の年次は、日本文化学科のみならず他学科の履修希望者に対しても適用されます。また、科目によっては、他の科目の履修を前提としているものがありますから、注意してください。
- 3) 人文学部生は多くの課程科目が卒業に必要な科目と一致しています。他学部生の場合は、課程科目のいくつかを卒業に必要な科目とは別に履修することになります。
- 4) 科目等履修生として登録する場合、本学以外の履修希望者は4年制大学の卒業生であることが必要となります。編入学生の場合は、編入した年度の始めに登録を開始します。科目等履修生及び編入生ともに、他大学での既修得単位は認められません。
- 5) 課程修了証書は、本学日本語教員養成課程規程に基づき、卒業時または年度末に授与されます。
- 6) 履修登録や教務関係についての問い合わせは、人文学部事務室窓口で行なってください。日本語教員養成や資格等、全般的なことについては下記の日本語教員養成課程委員の先生方に相談してください。

人文学部	日本文化学科	教授	中川かず子	英米文化学科	教授	柴田 崇
		教授	菅 泰雄		准教授	渡部あさみ
		教授	徳永 良次			
		教授	郡司 淳			
		講師	関本 真乃			

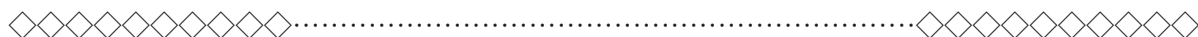
受講料について

本学の日本語教員養成課程を履修する場合、学則第51条の2に従い、受講料等を納入することになります。但し、**人文学部学生には受講料は免除されます。**

入学検定料（本学卒業者免除）		30,000 円
入 学 金（本学卒業者免除）		50,000 円

受 講 料	在 学 生（人文学部以外）	30,000 円
	卒 業 生	
	（本学及び他大学卒業）	9,000 円（1 単位）

修了証書手数料		5,000 円



受講希望者に望まれること

1987年に制定された日本語教員検定制度では、日本語教員には「国際的感覚と幅広い教養、豊かな人間性、日本語教育に関する専門的知識・能力等の資質・能力」が要求されるとあります。その後、2000年になって教員養成の教育内容に新たな視点が加わりました。それは、日本語教育を広い意味でのコミュニケーションと捉える考え方で、ガイドラインにあるように、「社会・文化・地域」、**「教育」**、「言語」の三領域をさらに5区分に分けた教育内容【①社会・文化・地域、②言語と社会、③言語と心理、④言語と教育、⑤言語】がコミュニケーションにつながるというものです。教授者と学習者が互いに学び、教え合うことが基本的なコミュニケーション活動であるとした上で、コミュニケーションを軸とする幅広い学問分野への関心を求めています。また、「言語と教育」の区分にある「実習」の重要性も指摘されています。2016年11月法務省による国内の日本語教育機関に対する告示の中にも、「実習」が日本語教員の要件の一つであることが示されています。本学の課程においては、開講科目の中に実習を含む授業のほか、国内・海外で実習を経験できる機会もありますので、積極的に実践の場を得るよう努めてほしいと思います。

本課程で開講されない科目で、教員養成に必要とされる教育内容（一覧表参照）は自主的に学習することを勧めます。それ以外では、外国語の知識と能力を身につけることが必要です。英語はもちろんのこと、韓国、中国ほかのアジアの言語でもコミュニケーションができることは理想ですが、少なくとも基本的な知識と運用能力は必要です。また、コミュニケーションの基本をなす日本語学、言語学はこれからも是非、引き続き学習を続けてください。

日本語教員を目指す仲間同士で、自主ゼミ等を組織し主体的に学びあうことは有意義です。また、本学の留学生との交流も体験し、彼らに対する日本語学習支援も皆さんにとっては学びにもなります。関連教員もできる限り協力を惜しまないつもりです。

積極的に学習機会を求め、より一層の自己研鑽に努めていきましょう。

❖❖❖❖❖❖ 卒業生の声 ❖❖❖❖❖❖

大学で学んだことを基に、日本語教師としての挑戦

今江久美子（2009年英米文化学科卒業）

卒業してから早4年、オーストラリア、フィリピン、スウェーデンと日本語教師をしながら海外の地を転々とし、現在は再度フィリピンの地で日本語教師として活動しています。

そもそも日本語教師になろうと思ったきっかけは、日本について自分が何も知らないと再認識する機会があったからでした。そんな私が最初に「日本語」を意識したのは、高校でオーストラリアへ留学し、現地の友達に日本語を教えた時でした。次の日からたどたどしい日本語で挨拶をしてくれたことに感動したことを覚えています。その一方で、次々に彼らから聞かれる日本についての質問。そんな質問の答えに詰まることがしばしばありもどかしい気持ちになりました。

そのことがきっかけで、母国である日本についてもっと知りたいと思うようになり、日本語教師を目指し始め、この大学へ入学しました。大学では日本語教師養成課程、そして英語科の教職課程を履修するとともに、学外の日本語教室でボランティアをさせていただきました。日本語教師という職業は日本語の知識以外にも様々な分野の知識を必要とする職業ですので、大学で学んだこと一つ一つが今の私の土台になっています。

また教師という職業は、教える職業でありながら学ぶことが非常に多い職業でもあります。そして生徒が変わればクラスの雰囲気も変わり、雰囲気が変われば自然と教えるスタイルも変わってくるので毎回同じことを教えていながらも決して飽きることはありません。私も日々新鮮な気持ちで授業をしています。

とはいえまだまだ日本語教師としての道を歩み始めたばかりです。

今後はさらに日本語、そして日本の知識を深めると共に、より広い視野で自分自身について、それから日本語教育についても考え続け成長していきたいと思います。



（前列中央が筆者）

❖❖❖❖❖❖ 卒業生の声 ❖❖❖❖❖❖

日本語教員養成課程を修了してからの歩み

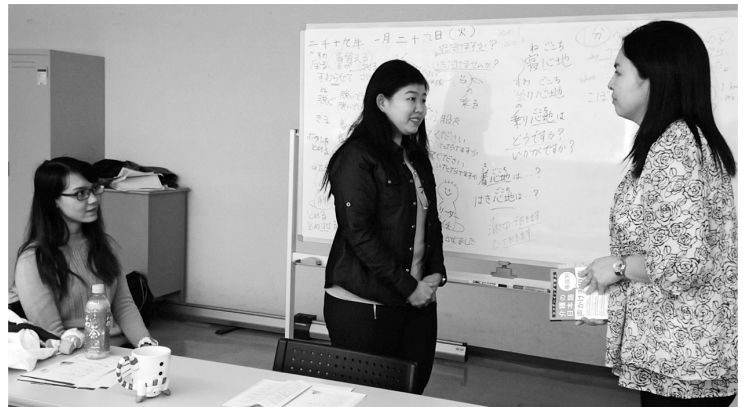
守岡(井上)みのり (文学研究科研究生)

こんにちは。私は2008年に人文学部日本文化学科に入学し、2012年3月に卒業するまでの間、本学の日本語教員養成課程を履修しました。養成課程でどのようなことが学べるのかは先生方が詳しいですから、ここでは卒業から現在まで、日本語教師として私がどのような経緯を経たのかについて簡単に記します。

2012年当時、卒業を控えていた私は「日本語教師として、日本語を外国語として学ぶ人たちと接し国内外で教えていくのであれば、一度は海外へ出てみたい。日本語以外の言語を学びたい」と思いました。そこでアメリカのオレゴン州、ポートランド市にて、日・英語のバイリンガル教育を施す小学校でアシスタントを務めました。初めての海外での生活、ホストファミリーとの交流、教育現場での経験は、その後の自分の仕事を決定付けるものとなりました。2013年からは札幌市にて派遣の仕事で学費を貯め、2014年からは日本語教育の更なる専門的知識の会得のため、本学の大学院文学研究科に入学しました。在学中の2015年から2016年にかけては、国際交流基金のプログラムにより、本学の提携大学であるカナダのレスブリッジ大学へ留学し、中高生、大学生へインターンとして日本語を教えました。2016年に帰国したのちは、短期で立命館慶祥高校の留学生に日本語を教え、2017年にはマンガを日本語教材として検討し、マンガに現れるジェンダー表現を分析するというテーマで修士論文を提出し、修士号を得るに至りました。

修士号以上の学歴を有していると、海外の大学でも教えることができるようになります。そこで同年には、中国の山東省、済南大学にて日本語講師として日本語科の学生に「会話」「聴解」「日本事情」などの科目を中心に日本語を教えました。日々の授業も大変面白く、更に大学の日本語クラブ、済南日本人教師会の勉強会、中国全土の大学生を対象とした「中華杯日本語スピーチコンテスト」の指導など、行事が盛り沢山でした。2018年には、さらに博士課程の進学を視野に、本学文学研究科の研究生として在籍し、中国の大学での実践を踏まえた論文を音声指導の観点から進めています。

2019年現在は、北海道に来た外国人技能実習生へ日本語を教えています。今後は引き続き本学の研究生として研究を進め、春からは北海道大学の留学生センターにて多国籍の留学生へ日本語を教えながら、研究者・日本語教師としてキャリアを積んでいきたいと考えています。



札幌市内、技能実習生と教室にて (写真一番右、筆者)

❖❖❖❖❖❖ 卒業生の声 ❖❖❖❖❖❖

日本語教師になるまでの道のり

田澤あす美(文学研究科修士課程 日本文化専攻2年)

日本語教員養成課程要項をご覧の皆様、こんにちは。僭越ながら、私の日本語教師になるまでの道のりをここでご紹介させていただきます。北海学園大学を卒業後、私はすぐにオーストラリアのメルボルンにある民間の日本語学校で日本語教師として有給インターンシップのプログラムに参加しました。日本語教育の需要が高いのはアジアですが、初めて海外で働く私は、一度旅行で行ったことがあるオーストラリアの方が安心でしたので、行くことを即決し、そこで初めて「先生」と呼ばれるようになりました。

契約期間が終わり、帰国後、私は日本語教師の職を探そうとせず、アパレルのお仕事を始めました。日本語教師の仕事はとても楽しかったのですが、授業をするために教科書を読みこんだり、教材を用意したりとかなり大変でしたから、少しお休みしたかったのが正直なところでした。しかし、自ら日本語教育から遠ざかったのに、アパレルのお仕事が休みの日は、ボランティアで日本語を教えていました。そしてそんな生活をしている間に自分がどちらの仕事の方が好きか嫌でもわかってきて、私はまた「先生」と呼ばれる生活を選びました。

次に行ったのはインドで、これは JICA 青年海外協力隊の日本語教育隊員として国立大学に派遣されました。コルカタ空港から車でどんどん田舎へ進んで4時間のところに派遣先があり、『こんなところで日本語を勉強している人がいるのか』という不安が付きまとう道中でしたが、そこには100人以上の日本語を勉強している学生たちが出迎えてくれました。彼らは日本企業に入ることを目指し、日本語を勉強しており、私も日本企業に必要とされる人材を育成しなくてはという使命感で時には厳しく指導していました。特に時間には口うるさかったので、のんびりとした田舎町で育った学生たちはみんな戸惑っていました。私の任期も終わろうとしている時、一人の学生が「あなたが授業で私たちにしてくれたことは、すべて私たちを思ってくれたことです」のメッセージをもらうまでは私も自分の指導に迷いがあったのですが、自分の思いが伝わっていて本当に嬉しかったです。

今、私は日本語教師として更なるステップアップのため、北海学園大学に戻ってきて、修士課程を履修しています。修士生として過ごしながらも、他大学の留学生と民間企業の技能実習生に日本語を教えているので「先生」と呼ばれています。「先生」と慕われることが何よりも喜びであり、この喜びが一生続くことを願っています。



留学生に対する日本語授業

卒業生の声

日本語教員養成課程を修了 ― 国語教師として現場へ ―

金田一志帆（2015年日本文化学科卒業）

学ぶことの楽しみを知ったのは、大学2年の時でした。日本語教授法の講義で日本語ボランティア教室「たんぽぽ」の存在を知り、教員を目指す身として様々な経験を積みたいと考え、迷わず教室に参加させて頂きました。恥ずかしながら何の知識も身につけていないまま迎えた活動初日、外国人の方々の学ぶ姿勢と、ボランティアとは思えないほどの熱意を持った会員の方々の姿を見て「真剣に言葉と向き合っている人がこんなにも沢山いるのか」と衝撃を受けたことを今でもはっきりと覚えています。その頃から、普段何気なく使っている言葉の複雑さや、秘められた美しさに気付き、やっと自ら“勉強”を始めたように思います。それから2年以上教室の一員として、外国人に日本語を教えていました。

また、教職課程のインターンシップ制度を利用し、北海学園札幌高等学校で行われるチューター講習にも参加しました。教育実習は市内の中学校へ行き、生徒が言語活動をする時間を1秒でも多くするよう努めることを学びました。今は高校で国語を教える立場になりましたが、これらすべての経験があるからこそ、より良い授業を模索することも、楽しむことも、上手くできない自分に立ち向かうこともできているのではと感じます。

さて、突然ですが、皆さんの周りに小さな子供はいますか。彼ら幼児は自らの成長に合わせて少しずつ言葉を覚え、物事を理解していきます。言葉とは、自分の世界を広げてくれる大切な要素の一つです。言葉によってコミュニケーションも豊かになり、さらに視野が広がります。日本語を学びたい！とやって来る外国の方々も、総じてコミュニケーションに一生懸命な方ばかりです。国際化が進み、多種多様な言語が飛び交う昨今だからこそ、自国の文化や言葉を大切にしていくことが必要だと私は考えます。自分が普段使用している言葉を今一度見つめ直して、言葉の持つ力や、ひいては美しさまで誰かに伝えられるようになれば素敵だとは思いませんか。私は国語科教員、つまり「国の言葉」を教え伝える立場にいますが、国の言葉とはすなわち「日本語」です。大学で日本語についての専門的な知識を学んだことで、より深い内容の授業を展開することができ、現在も非常に役立っています。今の時代だからこそ浮き出る日本語の特徴や芸術性をも伝えていける、そんな教師でありたいのです。

沢山の出会いができるこの大学で、皆さんは、どんな教員を目指しますか。



❖❖❖❖❖❖ 卒業生の声 ❖❖❖❖❖❖

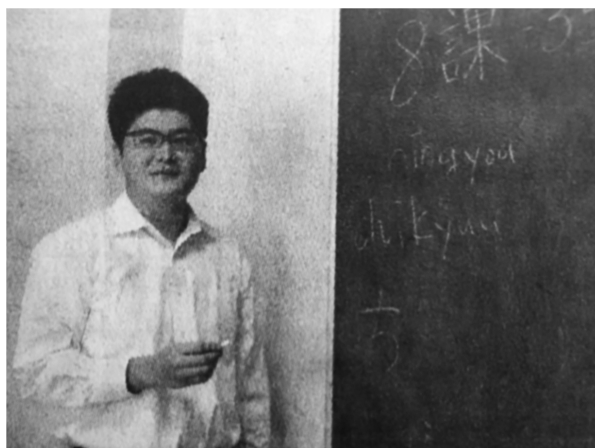
日本語教師と私

浅海宏一郎（2017年英米文化学科卒業）

私は2017年3月に大学を卒業し、同年9月から、モンゴルのウランバートルにあるモンゴル文化教育大学で日本語教師として勤務しています。教育実習以外で日本語を教えた経験がなかったこともあり、最初から苦勞の連続でした。どのような授業でも大変な点はありましたが、特に大変だと感じたのは、1年生の文法の授業です。ほとんどの1年生の学生は初めて日本語を学ぶので、最初のうちは、私の指示が伝わらない、コミュニケーションがとれないなどといった問題がありました。しかし、時間がたつにつれて、学生たちも次第に私の言葉を理解できるようになり、コミュニケーションがとれるようになったことから、私と学生たちとの距離も縮まりました。また、各学年に共通する課題は、熱心に授業を受ける学生もいる一方で、あまり授業に来なかったり、来ていても、あまりやる気が見られない学生がいることです。このような学生たちに授業内容に関心を持たせ、授業に参加させることができるように、現在も試行錯誤を続けています。

教師生活と同様に苦勞したことは、初めてのモンゴルでの生活です。特に私の場合は、初めての一人暮らしでもあったため、慣れるまでに時間がかかりましたが、困ったときにはいつも先生方や学生たちが助けてくれたおかげで、毎日快適な生活を送ることができるようになりました。モンゴルに来てから半年近く経ったものの、まだまだ仕事面でも生活面でもわからないことが多いですが、素晴らしい先生方や学生たちに恵まれ、充実したモンゴルでの教師生活をスタートさせることができました。

私が日本語教師になりたいと思うようになったきっかけは、日本語教育に興味があったからというよりも、海外で働きながら生活してみたかったからというものでしたが、実際に日本語教師として日本語を教えるようになってからは、日本語を教えることのおもしろさに気付き、日本語教育や教授法についても一度勉強して、より良い授業をできるようにしたいと考えるようになりました。これからも努力を重ねながら頑張っていきたいと思います。



モンゴル文化教育大学で日本語授業



北海道大学

■豊平校舎(経済・経営・法・人文学部)

〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号 代表(011)841-1161

■山鼻校舎(工学部)

〒064-0926 札幌市中央区南26条西11丁目1番1号 代表(011)841-1161